
ガールフレンドとサバイバルナイフ

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガールフレンドとサバイバルナイフ

【Nコード】

N0834F

【作者名】

西野了

【あらすじ】

小学校時代にいじめを受けたカズは、中学に進学すると美術部に入る。そこで哀しげで美しい瞳を持った真澄と出会う。また小学校のときカズのいじめの身代わりとなった変わり果てたトオヤマとも再会する。そして彼らが通う中学校も暴力が支配する世界だった・・・

第1章 暴力の闇の中で（前書き）

世界は暴力と破壊と絶望の深い闇に閉ざされている。少年たちは光を求め、新たな言葉を求め、ナイフを手にする。彼らはそのナイフで闇を切り裂き、生き延びることができるだろうか？ それとも・
・
・
・

第1章 暴力の闇の中で

市川和男はものごころついた頃から、カズと呼ばれていた。カズオよりもカズのほうが呼びやすいという理由だけで、他人がそう呼んでいることに他意はなかった。

カズの髪の毛は短めに刈られていて背は低く痩せぎすで、どこか頼りなさそうであった。顔は美人の母親似で目鼻立ちのはっきりとしていて整っていたが、その瞳はなんとも不思議な感じを与えていた。真つ黒な瞳は常に何かを探しているようで、あらゆる物事の本質を抉り出すかのような力を持っていた。その視線を受けるとほとんどの人は、なぜか後ろめたい気持ちになった。

そしてカズは無口で愛想がなく人を寄せ付けない雰囲気があった。学校の勉強はできなかった。おまけに運動もだめだった。同級生との共通の話題もなかった。カズはみんなに人気のあるテレビのバラエティ番組やドラマの面白さが全然わからなかった。バラエティ番組に出演している芸能人の下品な笑い顔を見続けると無性に腹が立ち、だんだん気分が悪くなってくる。陳腐な筋書きのドラマは、十分もすれば見る気が失せた。だからクラスのみんなと話すこともなく超然としていたので、当然いじめの標的となった。同級生から変な奴、エラソーな奴と思われ孤立した。小学生の高学年になると誰ひとりカズと口をきくものはいなくなつた。そして彼の存在は空気のようなもので徹底的に無視された。まるでカズがそこにいないかのようにみんなは振舞つた。もちろん教師の目の前では、カズを無視する子供はいない。教師たちは彼に対するいじめにまったく気づいてはいなかった。カズは学校の教師たちの鈍感さをよく知っていたので、自分がいじめられていることを話す気などなかった。また、そもそも教師にいじめを知らせること自体がありえないことだった。そんなことをすれば、カズに対するいじめがさらに激しさを増すことは明らかだったからだ。そして彼はそのような状況の中で

も、以前と変わらず人を馬鹿にしたような態度で学校に通い続けた。

カズが六年生になると、給食の時間もいじめが続いた。おかずの皿の中に様々なものが入れられた。まず青虫から始まった。次に団子虫となり、ミミズ、なめくじ、バッタ、消しゴム、石ころ、ゴキブリと何でもありだった。同級生たちは彼の反応を見ては楽しんでいた。カズが異物の入った給食を残すと、翌日はさらにひどいもの汚いものが入れることとなる。カズは毎日嘔吐感と戦いながら、必死で給食を飲み込み続けた。彼はこの身体は俺のものではないんだと念じながら、意地になって食べ続けていた。そして給食時間が終わるとあわててトイレに駆け込み、指に手をつつこんで食べたものを吐き出した。男の子たちはその様子を見て、カズのことを「ブタ」とか「ゲテモノ」「生ごみ処理機」とか呼んでは楽しんでいた。中にはヘラヘラ笑いながら「カズ、食べ物は大切にしなきゃいけないよ。もったいない、もったいない」と言う子もいた。女の子たちは「いやだー」「ヘンターイ」と言いながら、クスクス笑っていた。中には同情する子もいたが、少しでもそのような素振りを見せると、いつ自分がいじめの標的になるかもわからない。だから彼らもみんなと同じように笑っていた。カズ以外のクラスの者たちにとっては、これは昼食時の楽しいゲームなのだ。そしてこの楽しいゲームに参加しないことは、カズ以外の者にとって許されることではなかった。そこには闇の不文律が存在していた。

夏になると挨拶ゲームが流行した。ある朝ふだん誰からも挨拶されないカズが、登校中に突然クラスの男の子たちから声をかけられた。

「カズ、おはよう！」

「おはようございます！」

声をかけた順からカズの肩や背中をぼんぼんと軽く叩き、走り去

っていった。

カズは最初声をかけられびっくりしたが、その直後鋭い痛みが肩や背中に走った。チクチクと針が刺すような痛みだった。それはみんなの手のひらに画鋏が貼り付けられてあり、その鋭い針がカズの体に刺さっていたのだ。

「今週の目標はカズ君と挨拶することずえーす」

「僕たちは大変仲がいいので、毎朝挨拶をしまーす」

最初にカズの背中を叩いた男子がおどけた調子でそう言うと、他の男の子たちはゲラゲラと笑った。

カズは背中や肩の焼けるような痛みに歯をくいしばって耐えながら、大笑いしている男子たちを冷やかな目で眺めた。その視線は下等な生物を見下しているような、傲慢な光を湛えていた。

「なんだよ、その目つき」

「ゴキブリやなめくじを美味しそうに喰ってる変態が、偉そうに睨むんじゃねえ！」

「変態は変態らしく、痛くってとっても気持ちがいいわん、感じるう、もつとやってえ、くらい言え！ この馬鹿！」

同級生たちは下卑た笑い声を響かせながら、カズから走って離れていった。カズは彼らの姿をしばらく見つめ、それからおもむろに夏の青い空を見上げた。そこにはカズの心を刺激するものは何もなかった。無意味に力強い積乱雲とあきれるほど青い空があるだけだった。

カズは自分が受けているいじめについて家族にも知らせなかった。もつとも家族といえば、子育てに無頓着な母しかいなかった。

マイペースな母は、とびっきりの美人でスタイルも抜群だった。彼女は誰に対しても自然体で接することができ、また会う人が望んでいることを瞬時に与えることができた。そしてそのことが当たり前のように行われ、ほとんどの人間は初対面で彼女の魅力に参ってしまうのだ。だから生命保険の外務員の仕事は天職ともいえるほど

で、成績は営業所のトップを続けていた。母一人の稼ぎで十分に余裕のある生活が可能で、二人は最新の設備を備えた高層マンションに暮らしていた。

そんな母はカズに感じのよい笑みを浮かべながら「カズ、あなたももう中学生になるのだから、自分のことは自分でやってね」とよく言うのだった。言った当の本人は仕事で猛烈に忙しいらしく、朝早くから夜遅くまで出かけていた。

カズは彼女が自分たちの生活を支えるために多忙を極めているため、自分にあまり関われないことはわかっていた。だから自分ひとりで生きていかなければならないと、いつのまにかそう考えるようになっていた。

カズは凄惨ないじめにじつと耐えていたが、そのストレスをどうにか発散しないと自分自身が壊れてしまうのではないかと感じていた。三、四日に一度、精神的におかしくなる時間がやってくる。何をやってもし駄目な気分に陥り、自分以外のあらゆる物が自分を攻撃しているように思えてくるのだ。そうすると自分の体がどんどん沈み込んでいく感覚があった。そんなときカズは急いでトレーニングウェアに着替えて、家の近所を三十分くらい走ることになっていた。汗をかいて息をきらせて自分自身の身体感覚を確かめないと、なにかとんでもないことになりそうで自分自身が怖かった。

またカズは授業が終わると、同級生にわからないように行方をくらました。ときどき暗くなるまで住んでいるマンションに帰らなかった。人目につかない神社や公園、空き地がカズのお気に入りの場所だ。彼はそこで小さな暴力行為にふけていた。カッターナイフで捕まえた昆虫の足を切り落としたり、棒切れで花や葉っぱを叩き落したりした。ミミズが蟻たちに襲われ、のたうちまわっている様子をニヤニヤ笑いながら三十分でも一時間でも見続けていた。そのミミズが死んで動かなくなると、今度は後ろ足を切り落としたバツタを蟻の群れにいれて襲わせた。哀れなバツタはじたばたしながら、蟻たちの猛攻を受け絶命する。カズは生き物が苦しみながら死んで

いくのを見ると、胸がつかえていたものが消え去るのだ。それから猫の好きな煮干を野良猫に与え、徐々に警戒心を失わせてカズになつかせる。野良猫が一心不乱に煮干を食べていると、その尻を思いっきり蹴飛ばす。なにが起こったかわからない野良猫が、「ウギヤー」とか「ニヤン」とか叫びながら慌てて逃げ出す様子を見て喜んだりしていた。公園のトイレに鏡があれば、石を投げつけて割ったり、水道の蛇口を全開にして水を流しっぱなしにしたり、トイレットペーパーでトイレを詰まらせたりした。

カズは自分のやっている行いが、すべて悪いことだと思っていたが、どうにもやめられなかった。自分はこんなことをしなければ生きていけないと、漠然とそう思っていた。

第2章 緑色の夢

六年の夏休みが終わる頃のことだった。勉強が苦手のカズは、夏休みの宿題がほとんどできていなかった。また同級生からばかにされ、担任の教師から甲高い声で叱られると思うと、気分がむしゃくしゃした。いつもの遊びで気を晴らそうと思い、木々が鬱蒼と茂っている神社に足を運んだ。陽はかなり西に傾いており、ときどきツククボウシの鳴き声が寂しく聞こえる。あたりは誰もおらず広い神社を独り占めしているようで、それだけで彼は気分がよくなってきた。

ふと大きな木を目に留めるとカズは愛用のカッターナイフを取り出した。その木に傷をつけてやろうと思い、目には陰険な光が宿った。しかしその大きな木はカズの思いどおりにはならなかった。その木は硬くそして強かった。彼のカッターナイフでは、ほとんど傷つけることはできなかった。カズはなんだかその木に馬鹿にされているような気がして、だんだん腹が立つてきた。「ちくしょう」と叫びながら、彼はカッターナイフを思いっきり木に突き刺した。するとカッターナイフの刃は「バキッ」と乾いた音をたて、あっけなく折れた。次の瞬間カズの左目の上に鋭い痛みが走った。折れたカッターの刃が跳んできて、彼の左眉に突き刺さったのだ。そしてそこから流れ出た血が、彼の左目の視界を奪った。辺りの光景が赤薄くばやけたようになり、「ひーっ」と情けない声をあげ、腰を抜かしてしまった。

だが幸い傷はさほど深くはなく、カズは恐る恐るカッターナイフの刃を引き抜いて、傷口を水道の水で洗い流すと人心地ついた。それから辺りを見回し、誰もいないことを確認した。もしクラスの誰かに見られたら、それこそ一生このことからかわれ、馬鹿にされ、笑われ続けられるだろう。彼はいつもそんな風にしか考えられなかった。

その夜、カズは夢を見た。暗い森の中を一人で歩いている夢だった。緑がかった靄に覆われ視界が悪い。彼はどこまで歩き続けても森を抜けることができない。それどころか道は徐々に険しくなっていく。まるでけもの道のような道だ。足元から疲れが少しずつ這い上がってくる。

突然、頭上からパラパラと何かが落ちてくる。「蛭か！」と思い、あわてて首に吸い付いたものを無理やり剥がす。(しまった。蛭を無理やり剥がすと、皮膚がむけてしまうんだ) そう思い手に剥がしたものを見ると、それは太ったミミズだった。(ミミズなら血を吸われることはない。よかった)と夢の中で安心して自分のいる。しかし、手のひらを見ると真っ赤な血がべっとりついていていた。心臓が大きく鼓動する。(なぜだ！ どうして血がついているのか?) 血は左眉からだらだらと流れ出ている。しかし不思議と痛みはない。早く水道の水で洗い流さなきゃと焦る。(水道はどこ、水道はどこ、どこにあるんだ?) カズはハンカチで傷口を押さえながら、早足に歩き続けた。そのうち気がつく、血が止まっていた。傷口を覆っていたハンカチもまったく汚れていない。そして辺りを見回すと、すでに森を抜けていた。どこか見覚えのある神社の境内にカズはいた。目の前を見ると、大きな木の幹にカズのカッターナイフが突き刺さっている。その部分から、緑色の液体がだらだらと流れ落ちていた。また突き刺さったカッターナイフはブルブルと細かく震えている。(その緑色の液体は、その大きな木の血なのだ。カッターナイフに刺されて、木は痛がって、血を流して、苦しんで、泣いている。泣いているんだ。どうしよう、どうしよう!)

「うわーあ!」

カズは自分の泣き声で目をさました。目のふちはうつすらと涙で濡れている。はあはあと息が荒い。心臓の鼓動が部屋中に鳴り響いていると思えるくらい大きく聞こえる。今見た夢はまるで先ほどまで、自分が体験したようにカズには感じられた。薄暗く湿っぽい森の雰囲気、太ったミミズが蠢く感触、大きな木が流した緑の血、そ

れらはすべて現実のものであるような気がしていた。そして緑色の靄がかかった森の空気がいまだにカズの体はまわりついている感覚があった。

カズはその後眠ることが恐ろしくて、再度眠ることはできないだろうと思った。けれどもその不思議でリアルな夢を見たことで疲れたのか、知らないうちに眠りこけてしまった。今度は夢をまったく見なかった。

第3章 新学期の衝撃

憂鬱な新学期がやってきた。いじめられっ子にとっては、今日からまた心に鎧をつけて、いじめを受け止めなければならない日々が始まる。

カズはクリーム色の重そうなドアの前で一瞬立ち止まり大きく深呼吸した。それからおもむろにドアを開けて教室に入ってしまった。クラスの誰とも目を合わさないように、うつむきかげんで自分の席につく。

教室は妙に静かだ。夏休み中の出来事について自分以外の者は楽しそうに話しているはずなのに、とカズは不思議に思った。

担任の教師が少し強張った顔をして教室に入ってきた。ホームルームの始まる時刻になっていた。

担任の教師は、クラスのハセガワ君が夏休み中に交通事故で死んだことを緊張した面持ちで告げた。彼はクラスの中心的存在だった。カズに対するいじめに関しても残虐なアイデアを次々と考え出し、そのリーダーシップを遺憾なく発揮していた。

カズは教師の話聞き、驚いて反射的にあたりを見回した。しかしクラスのほかの人間はすでにその事故のことを知っていた。のけ者にされているカズだけが、ただ一人そのことを知らされていないかったのだ。

カズはハセガワが死んだということを聞き、悲しいとも淋しいとも想わなかった。勉強もスポーツもでき、楽しそうに学校生活を送っていた彼が、もう二度と目の前に現れることがないと思うと不思議な気がした。そのときカズが生まれて初めて死というものを、身近に感じた瞬間でもあった。あんなに元気で楽しそうに笑っていたいじめっ子があっけなく死ぬのに、俺のようないじじいじしたいじめられっ子がどうして生きていられるのか、そんな疑問も湧き起こった。自分は何のとりえもなく、自信も当然なく、人からは馬鹿にさ

れ、いじめられ、笑われて（唯一母親だけは例外だったが）どうして生きているのだろうとも考えた。だが彼は不思議なことに、これまでに死にたいと考えたことは一度もなかった。死を初めて身近に感じた今でさえ、そうだった。

しかし彼はそんなことを今まで考えたこともなかったので、だんだん頭の中が混乱してきた。そして精神的にも疲れてきてしまったので、そのことについて考えることをやめてしまった。

その日、カズに対するいじめはなかった。授業が終わって校門を出てからも、カズは半信半疑だった。頬をつねったり、顔を叩いたり、尾行されていないか後ろを振り返りながら、自分のお気に入り場所に向かって急いだ。

次の日もその次の日も、カズはいじめられなかった。彼にとってこんなことは初めてだった。いじめられ続けると、何もない状態はかえって不安になってくる。もしかすると、みんなはものすごく手の込んだひどいいじめを考えて準備しているのかもしれない。彼はそう思い始め、臆病な小動物のように四六時中あたりを見回したり、机の引き出しや自分の鞆をチェックしたりした。けれども何事も起こらない。（どうも変だ）

彼は自分に対する視線が、以前と変化していることに気がついた。これまではいつもクラスのみんなから軽蔑をふくんだ冷ややかな視線を感じていて、常に緊張していた。クラス中にカズがなにかの罠にはめられて、無様な姿をさらすことに期待する雰囲気もあった。そんな悪意に満ちた空気がカズのまわりにはなくなっていた。

いじめがなくなって四日目のことだった。

昼休み、クラスの男の子が数人近づいてきた。

「おい、カズ、話があるんだけど」

カズは緊張した。やっぱりいじめられるんだと身構えた。

「これからトオヤマとは口きかないようにしてくれないかな」

「あいつエラソーだよな。カズもそう思うだろ」

カズは思いがけない言葉にびっくりして、「ああ、ウン」と答え

るのが精一杯だった。

「トオヤマは勘違いしているから、しめないとなあ」

そう言いながら男子たちはカズの席から離れていった。

カズは胸のうちで（やったあ！）と叫んでいた。ついに自分に対するいじめが終わったのだ。そして哀れな生贄としてカズの身代わりにトオヤマが選ばれたのだ。（トオヤマは交通事故で死んだハセガワの後を、いつもついてまわっていた奴だ）

カズはトオヤマの席を見た。彼は硬い表情で下を向いていた。ふと視線を感じたのか、彼は顔を上げカズと目が合った。その目は哀れな色を帯びていた。そして何かにすがるような光もあった。カズはトオヤマの悲しそうな表情に一瞬胸をつかれたが、その感情を振り払うように首を振り右手で自分の胸を叩いた。もし自分がトオヤマに同情するような素振りを見せたら、その瞬間からまたカズに対するいじめが再開することになる。カズにとつて、その行為は絶対にしてはいけないことであり、いじめ世界では悪しき行いであった。世間一般でよいことはここでは悪いことなのだ。そのことを身にしてみて感じていたし、いじめ世界で学んだ教訓だった。

それにカズには、今からやらなければならないことが沢山あった。それは彼が再びいじめの標的にならないように、自分自身を変えることであつた。たとえばみんなと共通の話題を持つことができるように、情報を収集しなければならぬといったことだ。くだらないテレビ番組について楽しそうに話をしたり、騒音に聞こえるいわゆるヒット曲もチェックしなければならぬ。ファクションにも気を使わなければいけない。（ともかく、みんなと違ってはだめだ！）出しゃばらないように、自然と溶け込むように、集団に同化しなければならぬのだ。カズはこのチャンスを利用してはならないと本気で思っていた。ともかく表面的でいいから、みんなと仲良くしなければならなかった。

しかし彼には大きな弱点がひとつあつた。テレビや音楽、ファクションそれに顔の表情は、努力すればなんとかかなりそうだ。けれど

も勉強がまったくできない点については、彼自身の努力だけではどうしようもない気がした。少くらしい成績が悪いのはたいしたことではないが、明確に他の生徒たちと劣っていると、圧倒的に不利な立場になってしまう。

「そんなこともわからないの」と軽蔑されて蔑まれる。カズは再び周りからの冷たい視線を浴びている自分を想像すると、胃がきりきりと痛んだ。

けれども小学校の教師たちに教えてもらう気は毛頭なかった。彼は教師たちをみんな高圧的でおまけに表面的なところしか見ることでできない人間だと思っていた。教師たちの目には、カズは落ちこぼれで目つきの悪い陰気な子、クラス全体の成績のレベルを下げている問題児としか映っていなかった。カズはそんな人間たちに教える請うことなど、死んでも嫌だった。

いかにして成績を上げるか思い悩んでいるある日、母が夕食をレストランでどうかと誘ってきた。カズは、また生命保険の大口の契約がとれたのかなと思った。母の機嫌のよい日は、きまって豪華な夕食となるのだ。

カズは肉汁が滴るステーキを頬張りながら、自分がこれまでゴキブリやなめくじを食べさせられたことを母さんに話したら、どんな顔をするだろうと想像した。その言葉を聞き、

「あなたがだらしなから、いじめられるのよ！」と非難されるだろうか。それとも、いじめっ子の家や小学校の校長室に怒鳴り込むだろうか。はたまた「ふーん」と聞き流すのだろうか。カズはいつも母が何を考えているのか、よくわからなかった。他の親みたいになが子にべたべたするわけでもないし、そうかといって放置しているわけでもない。どちらかといえば彼にとって、非常に居心地のよいスタンスに彼女はいた。

「最近何かいいことあったの、カズ？」

母もステーキを口に運びながら、突然訊いてきた。

「えっ、どうして」

カズは少し驚いて、口の中にあつたもので、食道が詰まりそうになる。（この人はいつも突然、こんなことを言ってくる！）

「そりゃあ母親だからね。いわゆる母は何でも知っているっていうことよ」

「ふーん」

「まあ、あなたもいろいろ大変だと思うけど、よく我慢して学校に行っているよ。私だったら今の学校なんか行かないと思うけどね」

カズは母が自分のおかれていた状態をすべて知っていたのかと思った。また逆に全然わかっていないのかもしれないとも思った。しかし彼女の話はなぜかすんなりと胸に入ってくる。

「母さん、俺さ、頭悪いだろ」

「うーん、頭は悪いとは思わないけど学校の成績は確かに悪い。まあ勉強していかないからしょうがないか」

「なに他人事みたいに言ってるんだよ。自分の息子のことだぜ」

「学校の勉強で役立つのは、読み書きと四則計算くらいなものですよ。母さんなんて学歴はないけど、親子二人ともに暮らしているじゃない。学校の成績がよくても、仕事ができない人はたくさんいるよ」

母は白ワインを飲みながら、何だか楽しそうだった。

「それはそうだけど、やっぱり勉強がわからないと学校に行ってもつまらないし。俺も少しは真面目にやろうと思っているけど、今の授業、ちんぷんかんぷんなんだよ」

「あれだけ怠けていたら、そりゃあわからないでしょう」

「なに評論家みたいなこと言ってるんだよ。まったく、それでも母親かよー！」

「おお、コワッ！」

「真面目に聞いてくれよ。それで俺、塾へ行こうかと考えているんだけど、いいかな」

「へーえ、本気なんだ」

母はワイングラスに入った透明な液体を見ながら笑っている。カ

ズは食後のコーヒーをしかめ面で飲みながら、嬉しそうな母の顔を不思議そうに眺めていた。

「カズ、母さん、あなたが勉強をする気になったことは嬉しいよ。こういう理由かわからないけど。だけど塾に通っても多分、あなたの成績は変わらないと思う。落ちこぼれ専門の塾ならいいけど。それよりも、いい家庭教師つけてあげる。あなたが勉強でつまずいたところを見つけてもらって、しっかりケアしてもらったほうが手っ取り早いよ。母さんにまかせなさい」

母は芝居がかったように、左のこぶしで豊かな胸をたたいた。そしてまた白ワインを飲み続けていたが酔っ払っているわりには、彼女の話はまともで説得力があった。カズはとりあえず彼女の言ったことに従うことにした。

第4章 風変わりな家庭教師

それから一週間後の夕方、でっぷり太った中年のおばさんが、カズのマンションにやってきた。そのおばさんは短めの髪にゆるやかなパーマをかけていた。顔は太った体と同様にまん丸で、銀縁眼鏡の奥には人懐っこい目がのぞいていた。深い紺色のスーツとシンプルな白いブラウスという服装は、あっさりとした印象をカズに与えていた。彼女は母が見つけた家庭教師で、橋本と名のつた。

「まあ、ゆっくりぼちぼちとやっていきましょね」

橋本さんは甲高いけれども芯のある声で、カズに笑顔で語りかけた。その言葉を聞いて彼は拍子抜けしてしまった。家庭教師というからには若くてきりっとしていて、颯爽としたイメージがあつたらだ。

しかし橋本さんはベテランだった。カズが勉強でつまずいているところを、たちどころに見つけ出した。

「カズ才君、一番大事なことは文章を読むことよ。あなた、本、読まないでしょ」

「うん、でもマンガ本は読んでいる」

「マンガ本は絵を見てからセリフを読むでしょ。あれって、ほとんど脳が働いていないのよ。まあ、たしかにマンガは面白いけどね」

橋本さんはそう言いながら、自分の鞆の中からジュニア向けの本を何冊か取り出した。

「この中から面白そうな本を一冊選んで、来週までに読んでおく」と

「えっ、マジ？」

「わからない漢字は適当にすつとばしていいから。とにかく大体の意味がわかればいいの」

カズはこの家庭教師のおばさんが気に入った。彼女は小学校の教師みたいに細かいことを言わない。冷やかな眼差しも感じられない

い。それから自分のことを結構マジメに考えてくれるみたいだ。

その日は算数を教えてくれた。

「だいたい算数がわかんなくなるのは、四年生ぐらいからだからね」彼女はそう言うと、さっそく鞆の中から四年生の問題集を取り出した。たしかにカズが算数を嫌いになったのは、四年生くらいのときだ。カズはこの太った家庭教師の話が的をえているので感心した。それに小学校の教師みたいに嫌味なことをひとつも言わず丁寧に教えてくれるので、カズにしては珍しくやる気が持続していた。

「カズ才君、すごく長いこと集中して勉強できるじゃない。すごいわねえー。それだったら本一冊、来週まで読めそうね」

橋本さんは丸い顔をさらに丸くして言った。

カズは生まれて初めて勉強をしていて楽しいと感じた。そのことについて自分自身も驚いていた。

（母さんの人脈もたいしたものだ）そう思いながら、彼は母の得意そうな顔を思い浮かべた。

カズは橋本さんの言うとおり本を読もうと試みた。最初は本の世界になかなか入っていけなかったが、我慢して読み進めるとだんだん面白くなってきた。当初は少年向けの推理小説しか読まなかった。そのうちにファンタジー小説、伝記、ノンフィクションとジャンルが少しずつ広がってきた。

カズは自分がこんなに本が読めるとは思ってもみなかった。一時間二時間と長時間読書に集中ができるなんて、小学校の授業では考えられないことだった。橋本さんから借りる本だけでは満足できず、小学校の図書室を利用するようになった。そして図書室で会った同級生のタナカと本のこととでいろいろ話したりもした。自分を飾らないで、本当に興味のあることを話し合えるということは素晴らしいことだと、カズは感動した。（ウソの自分じゃなく、本当の自分を出して話ができる。なんて楽しいのだろう！）カズは本に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

また、いろんな本を読むことによって、カズの頭の中で様々な物

事が繋がるようになってきた。彼がこれまで見たり聞いたり感じたりした世界が一挙に広がったのだ。世界は汚いことや偽りや暴力以外に知的で美しいものが存在している。そして楽しいことや面白いことがたくさんある。カズはいじめられているときには全く見ることもできなかつたものが、少しずつ見るできるようになっていった。

橋本さんはカズあるとき、こう語りかけた。

「勉強するってことは、この世界の成り立ちを理解することよ、カズ君。私たちが日ごろ接している場所以外にも世界は存在しているの。それから表面的には見えないけれど、その見えないものの中に大切なものが含まれている場合もある。学ぶということは、あなたがこの世界をどういうふうに見て、あなたがその世界にどう関わっていくのか、それを自分で、自分自身で考え決定することなのよ」

カズはその言葉の意味を、半分も理解できていなかった。しかしその言葉はカズにとつてとても大事だと本能的に感じたので、忘れないようにノートにメモしておいた。

橋本さんはカズが小学校を卒業するまで、毎週一回やってきた。彼女が来るようになって、カズの学校の成績は母も驚くほど急激に伸びた。

カズは九月からいじめられることはなかった。カズの代わりにいじめの標的にされたトオヤマは十一月くらいから遅刻や早退、欠席を繰り返して、三学期からはまったく学校に来なくなつた。まわりの同級生はトオヤマのことを「根性なし」「いくじなし」「ヘタレ」と罵っていたが、カズにはそうは思えなかった。学校を休む、そのことはカズがいじめられているとき、ずっと考えていたことだつた。トオヤマが学校へ来なくなつたとき、カズはどうして自分は学校を休まなかつたのだらうと疑問に思った。いじめられて、授業もわからなくて、学校が大嫌いだつたのに。おそらく母にいじめのことを知られることが恐ろしかつたのだらう。カズは母にだけはよいけいな

心配をかけたくなかった。一生懸命働いて二人の生活を必死で支えてくれる母を、カズは大好きだった。だから学校を休むことはどうしてもできなかったのだ。

第5章 茶色い瞳の少女

カズが通い始めた中学校は厳しいことで有名だった。校則はやたら細かく教師は威圧的だった。いつも校門の前には目付きの悪い教師が二人立っていた。生徒が一秒でも遅刻すると、柄の悪い門番のような教師から、学年、クラス、名前をチェックされる。三回遅刻すると、生活指導の教師に呼びつけられ個別に厳しく指導される。それから保護者も呼び出され、家庭教育について細かく指導される。この学校ではどんな理由があれ遅刻は許されない。

入学式で校長が、本校は生徒の身だしなみがきちんとしており非行もいじめもない、また文武両道の伝統がある素晴らしい学校であると自慢げに話していた。しかし実際は不登校の生徒は多く、陰湿ないじめは横行していた。昨年は三年生が一人自殺する事件があったが、原因は不明だった。

カズはこの学校に足を一步踏み入れた瞬間から異様な雰囲気を感じた。それは、不自然に凝り固まった空気であり、常に誰かに監視されているような息苦しさであった。彼はこれから三年間、この中学に通わなければならないのかと思うとがっかりした。しかし変に暗い顔をしていると、小学校時代のようにまたクラスのみんなから孤立してしまう。カズはそれだけはなんとか避けなければならぬと思った。幸運なことに、小学校の図書室で仲良くなった友だち、タナカがいた。カズは彼のグループにもぐりこむことになんとか成功した。

入学して数日立つと、クラスも海に浮かぶ島々のようにそれぞれのグループができあがっていた。その中でただ一人ぼつんと席にと座っている男子生徒がいた。その男子生徒はトオヤマだった。最初、カズはその男子がトオヤマだとはわからなかった。以前の生意気そうでお調子者の風貌は跡形もなく消え去っていた。顔は青白く細長い目はどこかをじっと見つめているように静止している。髪は長く

伸びて頬はこけていて、全身から病的な匂いが漂っている。

カズはタナカに声をかけた。

「おい、あいつ、トオヤマじゃないか。変わったなあ」

タナカは声を潜めて答えた。

「俺、最初トオヤマだとわからなかった。あいつ、学校に通えるようになったけど、家では大変だったらしいよ」

「大変って、何が？」カズも声を潜めて訊いた。

「なんかナイフで手首切ったとか、ごはんが食べられなくなったとか。その代わり、夜中に冷蔵庫のものを全部食ったとか。心療内科っていうの？ 今でも通っていて薬も飲んでいるらしい」

「大丈夫かよ、見た目全然大丈夫そうじゃねえな」

カズとタナカは青白い顔をしてじっと座っているトオヤマをチラツ、チラツと見ながら、そのうちに黙り込んでしまった。

しばらくして、タナカがぼつりと言った。

「六年のとき、どうしてあんなふうになったのかなあ」

カズもタナカのその言葉に共感した。カズに対するいじめもトオヤマに対するいじめも、伝染病のようにクラス全体を巻き込んでいった。そこには特別な理由などなく、些細なことでのいじめが始まるのだ。

カズはタナカとつきあいだして、彼が優しくて思いやりのある性格だと感じていた。そんなタナカもカズをいじめる輪に積極的ではないにしろ、加わっていた。いじめられたカズもトオヤマに対するいじめをとめることはできなかった。

「どうする？」

カズはよく理由もわからずにタナカに訊いていた。

「どうするって言ったって・・・」

タナカがそう答えたとき、始業のチャイムが鳴った。

カズたちが通っている中学校では文化系にしろ体育系にしろ、三年生の夏まで部活動をしなければならなかった。カズは集団で行う

スポーツが苦手だった。だからといって体を動かすこと自体は嫌ではなくなっていた。中学生になった今も夜はときどき近所を走って気分転換をしている。だが彼は中学の運動部を見学して寒気がした。顧問や先輩の言うことは絶対的で、その練習はまるで軍隊のようだった。いったいここはどこなのだろう？ 二十一世紀の日本とは思えない雰囲気だ。カズは二、三の運動部を見学しただけで、嫌になっってしまった。

しかし、この学校では何らかの部に所属しなければならないのでとりあえず美術部に入った。カズ自身、絵を描くことは嫌いではなかったし、何よりも美術部の自由な雰囲気が入った。

顧問の山下先生は当然美術の教師だ。もじやもじやの長い髪に黒ぶちの眼鏡をかけている。眼鏡の奥には小汚い身だしなみに反して優しそうな目があった。長身で、やせていて昆虫のカマキリを思わせる。それも強いメスのカマキリではなく、交尾した後メスに食べられてしまう弱々しいオスのカマキリだ。

カズが美術部見学のため美術室を覗くと、「おお、今年は三人も入部希望者が来た。例年になく豊作だ、豊作だ」山下先生は喜び彼を手招きした。

「まあまあ、ここに座って紅茶でも飲みなさい。クッキーもあるぞ」新入部員勧誘のため、教師が食べ物を提供していいのだろうかとかズは一瞬戸惑ったが、なんだかここは面白そうな気がした。

山下先生に誘われてテーブルの席につくと、女子生徒がひとり座っていた。カズは彼女の茶色に輝くショートカットの髪に目を奪われた。それから彼女のつぶらで茶色に澄んでいる瞳に見つめられ、自分の心臓の鼓動が大きな音を立てたことに激しく動揺した。カズの隣に座っている女の子のピンクの頬はやわらかそうで、口元には常に微笑みが浮かんでいるように見える。彼女はカズを見ると、小さく微笑んで軽く頭を下げた。

「はじめまして、一年A組の小林真澄です。よろしく」

カズはその声をさわやかな風のように感じた。人の発する声が、

これほど胸に染み入るとは思ってもみなかった。そして柔らかく澄んだその響きは、なぜか少し悲しげにも聞こえた。

「市川和男、一年B組です」

カズは慌てて答えた。

「君も一年B組か。そういえば昨日入部した男子もB組だったなあ。絵は好きかい？ 彫刻は、グラフィックデザインとかは？ 陶芸とか面白いぞ、やったことある？」

「はあ、いや、あの・・・」

カズは予想外の展開に戸惑ったが、美術部の顧問はカズの意向などお構いなしに美術部の素晴らしさを喋り続けた。そしてカズは、山下先生の強引な勧誘に当然逆らうこともできず美術部に入部した。「部員は三年生の女子が一人、彼女が部長だが今日は来ていない。それから二年生も男子が一人、奴も今日は来ていない。一年生は君、市川君と彼女、小林さん。それから市川君と同じクラスのトオヤマ君だ、あーっ彼も今日は来ていないけど」

（トオヤマが同じ美術部かあ）カズは胸の中でつぶやいた。自分は入部を早まったのかもしれないと思ったが、いまさら入部を取り消す気持ちも当然起きなかった。

第6章 トオヤマの日常

トオヤマはほとんど喋らない。クラスの誰とも話さず教師に当てられても「わかりません」と答えるだけだった。青白い顔色と、あらぬところを見つめているような眼差しは、他者と交わることを遮断しているように感じられた。美術部にも入部申し込み以来一度も顔を出していない。

トオヤマはよく遅刻をした。そのため生徒指導の教師はトオヤマを目の仇のように思っていた。校門の前で毎日立って監視をしているゴリ（本名ワタナベ）は、とくにトオヤマを問題視していた。なぜならトオヤマは始業のチャイムが鳴っていても、慌てて学校に走りこもうとする様子もなくダラダラと歩いている。これまでも何度となくゴリは彼を怒鳴りあげたり、しつこく一時間も二時間も説教したが、彼はぼんやりとした表情をしているだけでほとんど反応がない。トオヤマは小学校のとき少しの間不登校だったようだが、それは彼の怠惰でだらしない無気力な性格が原因に決まっているとゴリは判断していた。

四月の終わりの日、トオヤマは相変わらず遅刻を続けていた。その日、ゴリは朝目が覚めたときから機嫌が悪かった。また、例の夢を見てしまったからだ。あの夢を見ると、決まって胸に異物が引っかかっているようで気分が悪い。その異様な感触が彼をいつも苛立たせる。そして彼は自分が教師であるにもかかわらず、自分の感情に従って行動していた。機嫌の悪いときは生徒を殴ってストレスを解消するのだ。そして機嫌の悪いゴリに遭遇した生徒は悲惨な状況に陥ることとなる。

ゴリはいつもよりもさらに不機嫌な顔をして、生徒たちの登校を監視していた。生徒たちは怒気を含んだゴリの視線を避けようと、足早に校門をくぐって行く。ただ一人校門の前で始業のチャイムが鳴り終わっても、だらしなく歩いている生徒がいた。トオヤマだ。

その無表情の顔を見ると、突然ゴリの頭の中で何かがスパークした。
（親父の無表情な顔が迫ってくる。親父は酒臭い息を撒き散らしながら、母親をそして自分たち子どもを殴り続ける）その忌まわしい映像はどれだけ振り払おうとしても、ゴリの夢の中に現れ、ふとした拍子でフラッシュバックする。次の瞬間、ゴリは思いっきりトオヤマの頬を平手で殴っていた。しかしトオヤマの表情はまったく変わらず、ぼんやりとした目で遠くを眺めていた。トオヤマの目には何も見えていないようでもあった。相手の無反応にゴリは逆上し、奇声を発しながらトオヤマの肩をつかみ石造りの校門にその痩せた体を押し付けた。ゴリの目は充血し、顔も怒りで真っ赤に染まっている。殺気を含んだ声は低く、ゆっくり一語一語丁寧に言葉を選んでいた。

「トオヤマ、おまえ、このガッコウに、く・る・な」

トオヤマの顔に変化はない。

「おまえみたいな、くずは死ね。ぼけ、カス、アホ！」ゴリはありとあらゆる悪罵を瘦せた中学一年生にあびせかけた。

（シネ？ 死ね、死ね、・・・）その言葉に初めてトオヤマは反応した。ぼんやりとした目は急に大きく見開かれ、顔は極度の緊張のため引きつっている。

トオヤマは暗い穴蔵の中にいた。ほとんど光の差さない空間にひとりでうずくまっていた。去年の夏休み以降、同級生からいじめられたり家族から愚痴を言われたりするとこの穴蔵に逃げ込んで、嵐が過ぎ去るのをただひたすら待っていた。けれども今、その穴蔵を外から破壊しようとするものがある。この暗い空間よりもさらに深い闇がトオヤマを襲っていた。

「死ね！ 死ね！」

「お前はクズだ。お前はクズだ」

「なぜ生きている！ お前が生きているとまわりが迷惑する」

（自動車に轢かれた野良猫のように、ズタズタに引き裂かれ、俺は死ぬのか？）

トオヤマは突如、白目をむき声にならない叫びを上げその場に倒れた。

（トオヤマ、おい！ トオヤマ・・・）トオヤマは遠くで自分の名前を呼んでいるような気がした。

目を覚ますとそこは保健室のベッドの上だった。気を失ったトオヤマをさすがに放置できず、ゴリともう一人の生徒指導の教師ナスが彼を保健室まで運んだのだった。白っぽい部屋の中は彼以外だれもいない。時計を見ると正午前だった。物音ひとつしない部屋の中で彼は自分に向かって呟いた。

「俺は・・・クズだ・・・」

その言葉を聞いた者は誰もいなかった。

トオヤマにとって時間は止まっているようでもあり、瞬間的に移動しているようでもあった。ふと気がつくと教室にいて今日の最後の授業が終わっていた。自分がいつ保健室を出て、給食を食べ、教室にもどったのか覚えていない。そもそも今日の給食のメニューすら記憶になかったし、食欲はこのところまったくなかった。時の流れに沿って自分が動いている自覚もなく、自分の足が地球という惑星に接している感覚もなかった。いつもあいまいな空間を浮遊している感覚しかなかった。

「トオヤマ」

自分を呼ぶ声に、ぼんやり目を向けると、黒く鋭い目と茶色の澄んだ瞳があった。

「トオヤマ、美術部の山下先生がこのチケットくれたんだ。一年生三人で観に行かないかって」

カズは早口でそう告げると、色鮮やかなチケットを一枚トオヤマの机の上に置いた。この街の美術館でクロード・モネの美術展が企画されていた。

「それで、もしよかったら五月三日の午前九時、美術館の正面玄関前に集合して三人で観ない？」

トオヤマは無表情で小林真澄の顔を見つめた。

「あつ私、A組の小林です。入部申し込みのとき、トオヤマ君といっしょにいたでしょ。憶えていないかな？」

トオヤマはその問いを無視し、チケットを手に取り三十秒ばかり見つめていた。カズと真澄は黙って待っていた。

「行けたら行く」

トオヤマはそう言うと、チケットをポケットの中に突っ込んだ。そして席から立ち上がり、足早に教室のドアの方に移動した。その行動はあまりにも突然だったので、カズと真澄は何か言い忘れたような気がしたのだった。

第7章 二人の風景

「すごかったね、モネの絵」

真澄はベンチに座りながら遠くを見るような目でカズに語りかけた。両手には自動販売機で買った冷えたオレンジジュースがのっている。水色のワンピースと白いコottonの靴下は五月の風にやさしく吹かれている。

「俺、感動した」

カズは文字通り圧倒されていた。それほど、モネの絵は衝撃的だった。

「市川君、市川君はどの絵が一番よかった？」真澄は小首を傾げたと訊いてきた。カズは彼女のつぶらな瞳に見つめられ、どきまぎしながら「えーっと、何とかのたそがれっていうやつ。ほら黄色がものすごく綺麗で、現実離れた感じで、最後の方にあった絵」と慌てて答えた。

「それって『ヴェネチアのたそがれ』じゃない。水面上に塔が建っている絵でしょ」

「そうそう、多分それだ」

「あの絵も素敵だったよね。オレンジ色と黄色の中間色の霧なのかな？　すごくロマンティックで幻想的で・・・市川君ってロマンチストなのかな」

「いや、とくに、そういうわけじゃないと思うけど。小林はどれがよかった？」カズは自分がロマンチストだと言われ、気恥ずかしくなり急いで訊き返した。

「私はねえ、『睡蓮』の連作かな、やつぱり」

「ああ、あのでかい葉っぱを、何枚も描いたやつ？」

「うん、同じ睡蓮だけれども、それぞれ全然違うよね」
「うん」

「描く時刻の違いとか、そのときの画家の気持ちとか、睡蓮自体の

僅かな成長とか、いろんな状況の変化によって、違う絵が描けるのかな」

「俺には同じものに見えるけど、モネには違うように見えるのか」

「市川君もモネと同じように、いろんな見方ができると思う」

「ええっ！俺、頭よくないし、単純だし」カズはかなり伸びた髪の毛を掻きながら、目の前の少女を不思議な思いで見つめた。目の前の少女は、彼がこれまで出会った女の子と明らかに違って、その違いが何なのか、それはまったくわからないのだが。

真澄はオレンジジュースを一口飲むと、小首を傾けて呟いた。

「自然って、あんなにきれいなんだね」

「うん」

「モネの絵って、自然のきれいなところだけ描いているけど、すごくリアルだよな」

「うん」

「絵を描く人って、普通の人が見ることのできないものを取り出して表現できるのかなあ？」

「そっか。上手いこと言うなあ、小林は。でも自然をあんなふうに見ることができると、モネは、目がものすごく良かったのかな」真澄はその言葉を聞き、少し笑いながら答えた。

「市川君、モネは晩年目の病氣と闘いながら絵を描いていたの。『睡蓮』を描いていたときも、手術をしたりして大変だったのよ」

「へえ、ベートーヴェンみたいだな。あつ、ベートーヴェンは耳が悪かったけ？」彼女はまた小さく笑いながら話を続けた。

「それでね、モネはあんなに美しい絵を描いたのだけど、守銭奴だったらしいの」

「シュセント？」

「そう。つまりお金にいやしいっていうか、きつちりしていたって本に書いてあったの」

「ふーん、でも、あんなにきれいな絵なら、すごく高い値段で売れるだろう。モネも意外とけちなんだ。小林は美術部だけあって、い

るんなこと知っているんだなあ」

その言葉を聞き、真澄は吹き出した。

「市川君も美術部の部員でしょう」

「あつ、そっか。そうだよな」

カズは彼女と話すと、いつも自然と頬が緩んでしまうのだ。ときどき自分に渴を入れて、緊張感を取り戻そうと思うのだが、ついっい彼女のやわらかな雰囲気にも馴染んでしまふ。そして、そのことが嬉しくもあり楽しかった。

「こらあ！ 少年、何をへらへらしているのだ」

突然ベンチの背後から、聞き覚えのある声が飛んできてカズは飛び上がった。振り向くと真つ赤なスーツをぴちつと着こなしている母がにやにや笑っていた。右手で肩までかかった豊かな髪を掻き揚げ、左手は腰に当て、まるで女優がグラビア撮影をするようにポーズをとっていた。

「母さん！」

カズは、驚きのあまり一言しか発することができなかった。

「わが子もついにデートをするようになったか。道理で、昨夜から落ち着かず、着ていく服をあれこれ試しては、ドタバタしていたわけだ」

「違うよ！ 顧問の先生が一年生三人で美術展を見に行けって、チケットくれたんだ」

「ほーお、そうですか。ところで隣のかわいい女の子は？」

「えっ、あつ、えつと」と意味をなさない言葉を言いながら、あたふたしているカズを嬉しそうに見ながら真澄はすつと立ち上がった。「こんにちは。はじめまして、一年A組の小林真澄です。市川君と同じ美術部で、いつも楽しくやっています」

「こんにちは、小林・・・ 真澄ちゃん、よろしく。ふーん、なるほど。ふんふん」

母は何故か頷く素振りをした。

「なんだよ、そのふんふんってのは」

「どうしてカズが美術部に入ったのか、その謎がたった今解けたのだ」と彼女は含み笑いをしつつ答えた。その言葉を聞き、カズは顔が真っ赤になった。そして何か反論しようと思ったが、話す言葉が思い浮かばなかった。

「おばさま、市川君が言ったとおり、今日は一年生三人で見る予定でした。でも、あと一人の男子が来なかったので二人で見て回ったわけです。おばさまもモネの絵を見られたのですか」

「そうなのよ。知り合いがチケットをプレゼントしてくれてね。私も絵は結構好きなの」

カズは話題が変わり、ほっと一息つくことができた。ところが母は、急にバッグの中から銀色のデジタルカメラを取り出して、妙なことを言い始めた。

「今日はカズの記念すべき第一回目のデートだから、記念写真を撮りましょうね」

「何、わけのわからないこと言ってんだよ！ それに何でカメラ持つてるわけ。小林だって迷惑だろ」

彼は真澄に同意を求めた。が、しかし、

「私も記念すべき第一回目のデートだから、写真を撮ってもらおうかな」という予想外の答が返ってきた。「そうだよねえ」と母はますます調子に乗り、二人の立ち位置を選んだりポーズを決めたりした。

「ほらほら、カズ。もっと真澄ちゃんに近づいて。何ぼーっとした顔してるの。いい？ 撮るよ、ハイ、チーズ」

カズはデジタルカメラのシャッター音を呆然と聞いていた。

「あともう一枚。今度は二人で腕組んでるところね。ハイ、ポーズ！」

「そんなことできるわけないだろ。もう・・・ウオツ！」

カズの左腕に真澄の柔らかな右腕がやさしく絡んできた。そのとき、カズは奇声を発するだけで体は硬直してしまった。真澄はその様子をいたずらそうな目で見ていた。

「そうそう真澄ちゃん、いい表情ねえ。カズは、まあ仕方ないかあ」
母はそう言つと、シャッターを押した。

(どうしてこんな展開になったのだろう)

カズは茫然自失の状態でベンチに座っていたが、真澄と母はデジタルカメラの画像を見ながら笑い合っている。

「じゃあね、カズ。真澄ちゃん、息子をよろしくね」

と言に残すと、母は颯爽と去って行った。

「市川君のお母さんって素敵ね」

真澄は母の去っていく後ろ姿を見ながら、しみじみと言った。

「素敵？ あの人は何考えているのか、わからないんだ。だから俺は、いつも母さんに振り回されっぱなしさ」

「でも、二人ともすごく仲良さそうで、いい感じ」

「そうかなあ。小林の母さんは、どうなの。まさか、あんな感じじゃないよな」

彼女は口元に少し淋しげな微笑を浮かべ答えた。

「私のお母さんは、市川君のお母さんとは正反対ってとこかな」

「そうだろうなあ、真面目でしっかりしているんだろ」

「そうね、ちゃんとしすぎているのかなあ。私がいい加減だから・・」

そう言い終えると真澄は地面に視線を落とした。ときどき彼女は一瞬心を沈みこませる表情を浮かべることがあった。今もそうだ。

そんなときカズは何を喋ったらいいか、またどうしたらよいか、わからなくなる。

しばらくして真澄はポツリと言った。

「トオヤマ君、来なかったね」

「うん」

「絵に興味がないのかな」

「あいつ、今大変なんだよ」

「大変って？」

真澄の澄んだ茶色の瞳が、まっすぐカズに向けられて問いかけて

いた。それに対し彼は腕を組んでうーんと言い、考え込んだ。

「あいつ、去年の二学期からいじめの標的だった」

カズは胸に重いものを感じながら、そこまで必死になって話した。真澄は静かに聞いている。

「クラスみんなから無視されて、それからだんだん学校に来なくなつて・・・」

カズはそこまで言うのが精一杯だった。心臓のあたりが鋭く痛んだ。俯いたまま、ハアハアと大きく息を吸い込んで吐き出し、その痛みが消え去るのを待った。そのとき真澄の暖かい両手がカズの冷えた右手をそつと包んだ。

「大丈夫？」

彼女の声と心配そうな表情がカズの胸に届くと、胸の痛みは少しずつ消え去っていった。

「大丈夫です」

カズは再び顔を真っ赤にさせながら、彼女の両手に包まれている右手をどうしようか、途方に暮れていた。

「フツ、市川君っておもしろい」

真澄は小悪魔的な笑みをもらしながら、さつと両手を膝にもどした。

「小林って見かけによらず大胆だな」

「そーお？」

しばらく二人は黙っていた。

「私、初めてトオヤマ君と会ったとき感じたのだけど、トオヤマ君って心と体がバラバラみたいな気がして」

（心と体がバラバラ。そうかもしれない。俺もいじめられたとき、自分だけの場所がないとおかしくなってしまうそうだった。心に別の部屋をつくらないと耐えられない）

「なんだか暗い部屋に一人閉じこもっているみたいで」

「うん」

「ねえ、そんなのって寂しいよね、つらいと思わない？」

「うん、あいつクラスでも浮いているし」

「そうなの。市川君、トオヤマ君を美術部に来るようにもつと誘ってみない？ 部室は自由でリラックスできる場所だし。トオヤマ君も気に入るかもしれないよ」

「うん」

カズはジェラシーを感じながらも、真澄の提案を受け入れた。彼女の言っていることは正しかったし、今の彼にとってトオヤマは以前のいじめっ子ではなくなっていたからだ。

「俺、ちよくちよく誘ってみるよ、でも小林は何でも知っているんだなあ。人の気持ちまでわかるのか」

「ううん、そんなことないよ。やっぱり同じ美術部の一年生同士だから、いっしょにやりたいでしょ。それだけ」

真澄はそう言うのと腕時計を見て、「私、家で用事があるから帰るわ。今日はありがとう。楽しかった」とベンチから立ち上がった。その言葉にカズはもつと彼女と話したいと思いながらも、頷いた。

第8章 美術室での会話

それから二日後、トオヤマはクロード・モネの絵の前にいた。

家においても母親の神経質な視線が始終つきまとい窒息しそうだった。しかし彼は外出しても行きたい場所などどこにもなかった。たまたま机の上にあったモネのチケットが目に入ったので、時間つぶしになるかと思い美術館に足を運んだにすぎない。

（そういえばカズと小林という女子と待ち合わせの約束をしたな。いつだったのだろう） 今の彼は人との約束を守ることなどできなくなっていた。

トオヤマは美術館に入ると人の流れに沿って、ぼんやりとモネの絵を眺めていった。こんなもの、なにが面白いのだろうと思ひながら機械的に視線を移していった。

「トオヤマ君」突然、右肩を軽く叩かれ彼は驚いて背後を振り返った。そこには山下先生が笑顔で立っていた。

「山下、先生・・・」

「トオヤマ君、市川君や井上さんといっしょに観に来なかったのかい？」

「はあ・・・」

「そうか、日程が合わなかったのかな。まあいいや。ところでどうだい。クロード・モネの絵は？ すばらしいだろう」

山下先生の問いにトオヤマは何と答えたらよいかわからなかった。しばらく考え、そしてモネの絵を改めて見つめた。

「モネの絵は嘘っぱいです」

その言葉は彼自身、思ってもみなかったものだし、美術部の顧問も驚いた表情を浮かべた。

「嘘っぱいってどういうことかな」

山下先生は穏やかにたずねた。

「世の中、あんなに光り輝いているわけがない」

トオヤマは硬い声で答えた。その答えは山下先生にとって驚きだった。そして、それはトオヤマの必死の叫びでもあった。山下先生は静かに語りかけた。

「確かに世の中がどう見えるか、一人ひとり違うよね。モネにとっては、世の中が絵のように光に満ち溢れ、美しい色がたくさんあったように見えたのだろうね。僕なんかも、モネみたいに見ることはできないけれど。トオヤマ君は今の世の中、どういう風に見えるのかな」

「灰色……」トオヤマは投げ捨てるように言った。

「灰色か。君にとって世界は灰色に見えるの？」

それっきりトオヤマは口を閉ざしてしまった。

山下先生は目の前の中学生がすでに語るべき言葉がないのだと、本能的に理解した。

「トオヤマ君、たまにでもいいから放課後、美術部に顔を出してみないか。市川君も井上さんも待っていると思うし。もちろん僕だって君が来てくれると嬉しいし。うん、調子のいい時でいいよ。辛いときはもちろん休んだほうがいいけど」

トオヤマはその言葉を聞くと小さく頭を下げ、出口の方へ足早に歩いて行った。山下先生は黙って彼を見送るしかなかった。自分が勤めている学校の瘦せ細った生徒がいつの間にか消え去ってしまうではないかと、漠然と思いながらその場に佇んでいた。

ゴールデンウィークが終わってもトオヤマの遅刻は続いていた。

登校する時刻も大幅に遅れ始め、学校に着くのが昼前だったりした。教室では相変わらず表情のない顔をして、自分の席を立つことはほとんどない。また体調を崩し保健室にいることも度々であった。そんなトオヤマに対してクラスの誰も声をかけるものはいなかった。唯一人、カズをのぞいて。

カズは週に一、二度トオヤマを美術部に来ないかと誘った。しかし、トオヤマは落ち窪んだ目に少し不思議そうな光を宿らせただけ

で、返事もせずに帰ってしまうのだった。

春の暖かさが夏の暑さに変わりかけた金曜日の放課後、カズと真澄は美術室で静物のデッサンをしていた。二人の前にはバナナとイチゴそしてりんごが皿にのっていた。

突然ドアが開きトオヤマが無表情で突っ立っていた。カズと真澄はお互い顔を見合わせ、山下先生は驚きの表情を浮かべた。しかしすぐ顔の表情を崩しトオヤマを手招きした。

「おお、トオヤマ君よく来たね。さあ、中へ入りなさい」

その言葉に反応したかのように、トオヤマはうつむき加減に歩き出し、真澄の隣の椅子に座った。真澄は彼に向かって軽く会釈をした。

「そつだ、この前の出張のとき買ったお土産があった。みんな、ちよつと休憩しよう。小林さん、僕と一緒にお茶をとりにいってこない。トオヤマ君、少し待っていてくれる。市川君、あとはよろしく」

そう言うとな山下先生は真澄と急ぎ足で美術室から出て行った。いきなり留守番をまかされたカズはトオヤマに何か話しかけねばと焦った。しかしトオヤマは机の上に置いた両腕を枕に突っ伏した格好で休んでいた。カズはその姿を見て、彼が本当に疲れているのだと感じた。いったい何が彼をここまで疲れさせ、傷つけたのかカズには見当がつかなかった。

（俺もトオヤマも同じようにいじめにあった。でも俺は今では結構うまくやっているつもりだし、毎日がそれなりに楽しい。トオヤマも今ではいじめは受けていないはずだ。でもこいつはいじめられた小学校のときより心も体も、もっと悪くなっているような気がする。何が原因でこんなにボロボロになってしまったのだろう。こんなに辛かったのなら学校に来なければいいのに）

そう思いながら十分間ほど無言でいたが、その時間がカズには、やたらに長く感じられた。ようやく山下先生と真澄が戻ってきた。手にそれぞれポットと湯のみ茶碗とお土産袋を持っている姿を見て、

カズは緊張感から解放された。

山下先生は饅頭を一個ずつ配り、真澄がポットから湯のみ茶碗にお茶をついだ。番茶のいい香りがあたりを漂った。その間もトオヤマは机に突っ伏したままだ。

「トオヤマ君」

真澄が覗き込むように声をかけると、トオヤマは僅かに顔を上げた。

「食べない？ おいしそうだよ」

彼はそれには答えず、少しだけお茶を飲んだ。

「さて、トオヤマ君も来たことだし、君たち三人でスケッチに行ったらどうか。若葉のきれいな季節だし。どうだい、自然を描くことはとても勉強になるぞ」

「明日は天気も良さそうだし、ねっ、行こう」

真澄はさきほど先生と打ち合わせしたようで、すっかりその気になっている。

「は、はい」とカズは答えたが、遠山は相変わらず黙っていた。

「ねっ、市川君、どこかい場所知らない？」

カズはいきなり真澄に訊かれ戸惑ったが、すぐに閃いた。以前よく隠れ家として利用した神社の名前を言った。確かに木々が鬱蒼と茂り、スケッチの材料には事欠かない。真澄もトオヤマもその場所は、知っていた。

「トオヤマ君、無理にスケッチしなくてもいいよ。その緑の木々を見るだけでもいい。この時期の新緑を肌で感じることであればそれで十分だ。市川君も小林さんもいるし、楽な気分でおいでよ」

「先生、私も見るだけでいいですか」

真澄は右手を上げつつ、おどけた調子で訊いた。

「うーん、見ることも勉強だし、まあいいか」

「市川君、いい場所考えておいてよ」

真澄はカズに何やら目配せをした。カズはようやくこの会話がトオヤマのために仕組まれたものだと思がかった。

「わかった。いいポイントを決めとくよ」

「私、クッキー作っていくから二人ともちゃんと来てよ」

「小林の手作りクッキー、大丈夫か。俺クッキーよりしょっぱいおかきの方がいいけど」

「ひどい。市川君にはクッキーなし！ トオヤマ君のために作るから明日きてよね」

彼女がピンクのほほをふくらませながらトオヤマに問いかけた。

「ああ・・・」

トオヤマは初めて顔を上げ、真澄をちらつと見てそう答えた。

第9章 真澄の秘密

春の終わりの風は、木々の梢を揺らしていた。

陽の光が新緑に反射し、そのまわりの空間を薄い緑色に染めていた。木々の若葉は暴力的ともいえるエネルギーを放射していた。

真澄は背の高い木々を嬉しそうに見上げていた。時折強く吹く風が彼女の柔らかな髪を舞い上げる。夏用の制服は真っ白で、紺とグレーのチェックのスカートはしなやかな肢体にフィットしていた。

カズは神社の濡れ縁に座って、目の前の檜の木をスケッチしていた。

この神社の境内に十時に集まるはずだったが、十五分過ぎてもトオヤマの姿はなかった。

真澄がカズの隣に座り、左手にはめてある腕時計をちらりと見ながら呟いた。

「トオヤマ君遅いねえ」

「うん」

「今日も来ないのかなあ」

真澄は紺色のデイバッグの中身を確認しながら、不安そうに訊いた。バッグの中にはクッキーの袋とポットが入っている。

「いや、あいつ、今日は来ると思う」

「どうして」

彼女のまつすぐな視線を受け、カズは少しどきまぎしながら答えた。

「あいつ、昨日ちゃんと返事をしただろ。俺同じクラスだけど、あいつがまともに返事したの、中学に入ってから初めて聞いた。だから多分今日は来るよ」

「そうかな」

「ところで、小林は本当にクッキーとお茶以外に何も持ってこなかったんだ。すごいな」

「すごいって当たり前でしょ。市川君はどうしてスケッチブックなんか持ってきたの」

「どうしてって今日はスケッチしに来たんだろ」

「もう、市川君ってわかってないのね」

「えっ、なにになに？　どういうこと」

彼女の言葉にカズは動揺した。その仕草がおかしかったのか、真澄はぷつと吹き出しながら優しく笑って答えた。

「今日はともかく、トオヤマ君が出て来やすくなることが第一なのよ。彼は全然部活動に参加していないから、いきなりスケッチしようと言っても難しいでしょ」

「あーっ、そうかあ。俺ってにぶいなあ」

「ふふっ、でもその図太いところが、市川君のいいところでもあるんじゃない」

カズはその言葉を聞き、心底嬉しかったが表情には出さずにスケッチを見直す振りをした。

「おい」

背後で低く感情を押し殺した声がした。

二人は驚いて声のする方に目をやると、ゴリことワタナベ教諭が疑り深い表情をして立っていた。灰色のトレーニングウェアは盛り上がった胸のところであらなく大きく開いており、その威圧的な姿は教育者というよりは、暴力を生業とした人間に見える。

すぐさまカズと真澄はゴリに言われるまでもなく座っていた濡れ縁から降り、彼の前に立った。ゴリは何も指示していないが、二人ともそうしなければいけないような気がしたからだ。

ゴリはまず真澄の足元に視線を落とし、靴、靴下、スカート、デイベッグ、ブラウス、顔、髪と順番にその疑り深そうな三白眼でチェックしていった。その視線は、体の内部まで強引に入り込むようで、彼女は急に息苦しさを覚え脈拍も速くなってしまった。

カズはゴリの高圧的で無遠慮な態度に激しい嫌悪感を抱いていた。このままじっと彼の冷酷な視線に自分たち二人が無抵抗のまま晒さ

れることは、正しくないことに従っている気がした。しかし、彼は自分が何をどうしてよいのかわからなかった。だから無様に感じていても突っ立っているしかなかった。

ゴリは無言のまま二人の全身をくまなくチェックした。

「お前ら何年何組だ？」

「・・・一年B組、市川和男」カズはぶっきらぼうに答えた。

「一年A組、小林真澄です」

「小林・・・小林ヒカルの妹か？」

「ハイ」静かに頷く真澄をゴリはしばらく凝視していた。彼の頭の中に解決のつかない問題が突然現れ、そのことについて思い悩んでいる、そんな表情が一瞬浮かんだ。しかし次の瞬間、彼は我に返っていた。

「お前ら、土曜の朝からこんな所で何やってんだ！」

「俺たち美術部で、デッサンの練習のためここに来ています」

「デッサンの練習？　小林！　お前はスケッチブックとか持っていないじゃないか。いい加減なこと言うな！」

「美しい風景を見ることが絵を描く勉強だと、山下先生は言っていました」真澄は必死に返答した。

「嘘だと思うのなら山下先生に聞けばいいじゃないですか」カズの言葉は怒気を含んでいた。

「なんだあ、その口のきき方は！　それが教師に対する態度か。あん？　文化部の奴らは口だけは達者だなあ。おい、お前ら、お前らみたいな頭でつかちが、恋愛の真似事をしてややこしい事件を起こすんだ。部活にかこつけてデートなんかするなあ！　ボケ！」

カズは学校での息苦しい雰囲気の原因はこいつだと悟った。中学生の自由な発想だとか繊細な感性とかを不要で有害なものと思なし、教師の考えを押しつけることが教育だと思い込んでいる典型的な人物が目の前にいた。

彼はこれまでの経験から、ゴリのような教師が理不尽な行動をするのは仕方がないと割り切っていた。けれども真澄がすっかり元氣

をなくしていることは、彼はとても気がかりだった。ゴリの攻撃対象が自分ではなくて彼女だという気がして不安でもあり、徐々に怒りがこみ上げてきた。

「おい、一年の美術部員は二人しかないのか？ ええ、小林どうなんだあ」

「三人いる」

ふいに後方から聞き覚えのある声がして、ゴリは驚いて振り返った。

「トオヤマ」

トオヤマの動かない目がゴリの目をまっすぐ見つめていた。

息を呑む雰囲気あたりを包み、その状態が数秒間続いた。風が止んでいた。やわらかな五月の陽光は無関心に降り注いでいる。

「お前みたいな奴が美術部か。お似合いだよ。どうせ幽霊部員だろ」
「そんな言い方ひどいじゃないですか。トオヤマ君が体調を崩していることは先生だった知っているでしょう」

真澄の声は珍しく感情的に響いた。

「フン！ お前ら、よく聞けよ。中学生くらいまでは身体を鍛えなければダメだ。社会はお前らが思っているほど甘くない。生きるってことは自分で自分を守ることだ！ 身体も心も強くなければ生き延びることはできないんだよ！ 小林、お前なら、この意味がわかるだろ、あん？ 他の二人の馬鹿に教えてやれ」

ゴリの細い目がジロリと真澄の方へ動いた。その時、彼女は右手に持っていたデイバッグをストンと落としてしまった。けれども彼女はそのことにまったく気付いてはいなかった。彼女の顔色は蒼白になり体は小刻みに震えていた。カズもトオヤマも彼女のこのような姿を初めて見たのでびっくりしてしまい、いったい何が起こったのか、さっぱりわからなかった。

チェツと舌打ちすると、ゴリはこれ以上話しても仕方がないといった表情を浮かべ、その場を足早に立ち去った。

真澄は膝を抱え座り込んでしまった。目をつぶり、持病の発作が

通り過ぎるのを待つような感じで、長く深く呼吸している。彼女は数分間そのままの姿勢で同じことを繰り返しただろうか。すでに先ほどまでの体の震えは消えていた。

カズはゴリがいなくなったことと、彼女の様子が落ち着いてきたこともあって少しほっとした。彼も座り込んで彼女の顔を眺めたが、真つ青だった頬も少しずつ赤みがもどってきたことがわかり、ようやく安心した。

その間トオヤマはゴリの帰っていった方向を険しい目つきですつと見ていた。

しばらくすると真澄は立ち上がり、うーんと言う声とともに大きく背伸びをした。そして少しあつけにとられているカズに向かって「市川君、心配した？」と、いたずらっぽく問いかけてきた。

予想外の言葉にカズは、「ああ、ウン」と答えるしかなかった。

「小林」

突然のトオヤマの声に二人はびっくりした。そして、なぜかその声は彼らを緊張させた。

「小林の兄貴は、小林ヒカルか？」

その言葉のために再び真澄は息が止まったかに見えたが、彼女はトオヤマの問いに小さく頷いた。するとトオヤマは何かを考えているような、何かに耳を傾けているような表情を浮かべ、そして突然頭を両手で抱えこんだ。

「あのブタ野郎が、すべて悪いんだ。ぶつ殺してやる、ぶつ殺してやる！」

トオヤマは独りでぶつぶつ言いながら、二人に背を向けて歩き始めた。カズは慌ててトオヤマの左肩に手を掛け引きとめようとしたが彼はその手を乱暴に振り解き、反射的にカズを睨んだ。その目の光はいつもカズが教室で目にしたものとは、明らかに違っていった。どんよりとした力のない目ではなく、凶暴で狂気に満ちた光を放っていた。その禍々しい視線にカズは圧倒され、その場に立ち尽くした。

「トオヤマ君、待って！」

真澄の悲鳴に近い言葉に、トオヤマは「はっ」と反応した。そして彼女の存在に初めて気がついた表情を浮かべ、彼女を見つめた。その目には先ほどまでの凶暴な光はなく哀しみの色が浮かび、また泣いているようにも見えた。しかし、彼女の声がトオヤマを引き止めることができたのはほんの数秒間で、彼は突然走り出し、二人の視界からあつという間に消えてしまった。全力で走りながら、何事か言っているその姿は、二人をひどく不安にさせた。

カズはトオヤマが走り去った方をぼんやりと眺めながら考えていた。(せつかくトオヤマの奴を元気づけようとみんなで準備したのに。ゴリの野郎のせいでぶち壊した。だけど小林の兄貴、ヒカルっていつてたっけ。その名前が出ると小林は落ち込むし、トオヤマは切れるし、ゴリの野郎まで変な顔をするし、一体どういうことだ?) 真澄の兄に関わることにについて、カズは自分には手に負えないような問題があるのでは、漠然とそんな気がしてきた。

彼は気を取り直して真澄の方を振り返った。彼女は思いつめたような、何か辛いことを思い出したような表情を浮かべていた。

カズはまたわけがわからなくなってしまった。こんなに感情が不安定な真澄を見るのは初めてだ。そのとき彼は自分が強く心惹かれている女の子が、自分とは全く違った遠い世界に住んでいるのではないかと感じられた。それは彼にとって淋しく辛く想いだった。そして自分が十三歳であることを悔やんだ。自分の力の弱さ、知識の乏しさ、心の狭さをまざまざと意識してしまふ。「はぁー」と深いため息が知らずに出ていた。その声に気付き、真澄も少し疲れた声でポツリと言った。

「市川君、クッキー食べようか」

二人は自分たちを縛っている重苦しい空気を跳ね除けるかのよう
に、神社の方へ足を進めた。

第10章 ヒカルとハセガワ

その夜カズはさんざん迷ったあげく、同級生のタナカに電話した。ワイヤレス受話器の点滅がやけに長く感じる。電話に出た母親らしい女性に丁寧に対応すると、しばらくしてタナカの穏やかな声が耳に届いた。

「どうした、珍しいねえ」

「あのさ、悪いけど、ちょっと教えてほしいことがあるんだ」

「何？ わざわざ電話で。ハハーン、君の大好きな小林真澄ちゃんのことだろ」

「なんで、なんでわかる？」カズはいきなりカウンターパンチをくらったボクサーのように動揺した。

「ははは、カズ君、君は以前クールとか無愛想だったけど、最近はともわかりやすいよ。いいよなあ美術部は楽しそうで、可愛い真澄ちゃんもいるし。俺もテニス部なんて入るんじゃないかったよ。馬鹿な上級生は威張りくさってしごきばかりするし。あいつらホントに陰険なやり方するんだぜ！」

カズがしばらくタナカの愚痴をおとなしく聞いていると、彼もすつきりしたのか本題に入った。

「なあ、お前を信じて訊くけど小林の兄貴、自殺したのか？」

「なんだ、今頃知ったの。お前ホントに自分の関心外のことについては無知だな。あれは去年の夏だったと思う。真澄ちゃんの兄貴、自分の部屋で手首を切ったんだ、ナイフで。このあたりじゃあ相当な騒ぎだったぜ。マスコミも押しかけてきたし、週刊誌なんかにも取り上げられたみたいだよ」

「そうか。それで自殺の原因とか知ってる？」

「それが、どうもはつきりしないらしい。真澄ちゃんの兄貴が中三で、クラスの担任がゴリで、それで自殺したんじゃないかっていう笑えない冗談みたいな話はあったけど」

「あいつが担任だと、自殺したくなる奴は結構いるんじゃない。マジで」

カズはそう話ながら、今日の出来事を思い出し、急に頭が熱くなってきた。（それで小林がショックを受けたのか。ゴリの野郎、教師のくせになんてこと言う奴だ！）

「まあ確かにそれは言える。けど小林の兄貴は超優等生だったんだぜ。テニス部のキャプテンで男子シングルス県大会優勝、勉強も学年トップ、おまけにハンサムで性格も抜群によかったらしい。マンガでもあんな主人公いないよ。でも現実には存在した」

「へえ、そうなのか」

「女子だけでなく、先生や親までファンがたくさんいたらしいぜ。一種のアイドルだな。ゴリでさえ、自慢の生徒であの不細工な鼻が高々だったみたい。実際そうとう可愛がっていたらしい。お前想像できるか、ゴリが生徒に愛想よくしていたって！ だからゴリのいびりが原因で自殺したってことはありえないよ。あの馬鹿も、小林ヒカル of 自殺には人並みにショックを受けたらしい」

カズはタナカのもたらした情報により、今日の不可解な出来事が彼の頭の中で少しずつ意味を持つようになってきた。

「それにしても、お前よく知っているな」

カズのしみじみとした言葉にタナカは気を良くしたようだった。「俺の母さん、去年PTAの役員やっていたからいろんな情報が入るんだ。それに去年の夏は、クラスのハセガワも交通事故で死んだら。あれも一部じゃあ自殺じゃないかって噂もあったんだ。なんでも自分から反対車線のトラックに自転車ごと突っ込んだみたいなお話もあった」

「うそお」

「一応、事故死ということで済ましたみたいだけど。ただハセガワも優等生で小林ヒカルも超優等生だから、あの当時は親も教師もそうつと神経質になっていた。それに二人とも同じテニスクラブに通っていたんだ。奇遇だよな。それで俺、子供でも死ぬのかって初め

て思ったよ」

「うん」

「そのとき俺初めて、カズに悪いなあって感じたよ。お前も、もしかしたら自殺しちゃうんじゃないかと心配した」

カズは受話器を持ったまま混乱していた。それは無言のメッセ―ジとなってタナカに届いた。

「まあ、真澄ちゃんは可愛いし人気があるから、誰かにとられないようにお前も気をつけろよ」タナカは無理やり明るい声で、重い空気を切り裂いた。

「なんだよ、それ。それから今の話は」

「わかってるよ。誰にも言わないさ。俺もこんな話をするつもりはなかったし。じゃあな」

「うん、またな」

カズは受話器を机の上に置くと、ベッドに寝転んだ。白い天井が見える。涼しげな眼差しでいつも淋しそうに微笑んでいる真澄の顔を思い浮かべた。(淋しそう？ そうだ、小林の表情はいつも淋しそうだ。彼女が他の女の子と違っていている点はそこだった。すごくしつかりして、いつもはきはきと喋っているからわからなかったけど)

彼は机の引き出しから二枚の写真を取り出した。それは美術館付近のベンチで母が強引に二人を並べて撮ったものだ。硬直してうつろな表情の自分とは正反対な笑顔の真澄がいた。その光がこぼれるような笑顔の持ち主は、未来が楽しく面白いことばかりであり、そのことがすでに約束されているかのように見える。

カズは二枚の写真を交互に見ながら、今日の出来事を思い出していた。

第11章 雷雨の中のサバイバルナイフ

ゴリがいなくなりトオヤマが走り去った後、二人は神社の濡れ縁にならんで座った。

「小林、これ、うちの母さんから」

カズはそう言つと、デイバッグから写真を二枚取り出して、彼女に渡した。

「あー、これ連休のとき、お母さんに撮ってもらったやつ」

「ああ」

彼女はフツと小さく笑いながら、その写真を見た。真澄の横顔を見ながら、カズはその写真を受け取った時、言つた母の言葉を思い出していた。（真澄ちゃんってすごく可愛いけど、何ていうか深い笑顔だよな。中学生でこんな表情ができるなんて、びっくり）仕事柄たくさんの人に接している母だからこそ感じる事があつたのだろつか？ カズは母の言葉の意味がはっきりとはわからなかったが、心の片隅に引かかる感触があつた。

「市川君は写真嫌いなのか？　なんだか怒っているみたい」

彼の思索は中断された。

「俺の顔はそんなもんだよ」その言葉に反応したように、真澄は二人が腕を組んでいる写真とカズの顔を見比べた。彼女に自分が見つめられていることを意識して、カズは落ち着かなかつた。

「でも、この写真ワタナベ先生に見つかったら、完璧にデートだと思われたよね」

真澄の口調は秘密を打ち明けるようだった。

「小林こそ、バッグの中見られたらやばかつたじゃん」

「えへっ、そうだね。そうそうクッキー食べようよ」

彼女もデイバッグから黄色いポットと紫と紺と紅の模様が入ったスチール製の容器を取り出した。その容器には星型、ハート型、林檎型と様々な形をした小さなチョコレートクッキーが入っていた。

カズは星型のクッキーを口にした。チョコレートの香りと控えめな甘さが消耗した体を少し励ましてくれた。

「どう、美味しい？」

「うん」

「トオヤマ君もいてくれたらよかったのに」

カズはトオヤマが走り去っていった道をぼんやり眺めていた。その道の近くに櫟・の大きな木が立っている。カズがトオヤマやハセガワたちにいじめられ、憎しみや苛立ち、悲しみや孤立感による淋しさをカッターナイフにこめて、あの大きな櫟の木にぶつけたのは少し前のことだ。カズにとって世界のほとんどすべてのものが苛立ちや憎しみの対象だったあの頃、そしてその象徴だったあの大きな木を、今は穏やかな気持ちで白いスケッチブックに描くことができる。大好きな女の子と座って、彼女の作ってくれたクッキーを食べながら、やさしい風に吹かれている。だけどトオヤマは心を病み憎しみに蝕まれ、あの木の横を何事か呟きながら走り去っていった。（もしかして、俺がトオヤマで、トオヤマが俺であってもおかしくなかった。去年の夏ハセガワが死ななければ、俺はずっといじめられ続け、そして小林とも会えることもなかったかもしれない）

カズは暖かい紅茶を口に感じながら、そんな思いにとらわれていた。

「でもトオヤマ君来てくれてよかったね」真澄の呟きに彼は現実に戻った。

「ああ、あいつが来てくれたから助かった」

「ワタナベ先生、どうしてあんなこと言うのかなあ」

その時、神社を取り囲んでいる木々が上の方でザーと鳴った。強い風が上空で舞っている。深い緑色の葉が、様々な形の葉が空から落ちてきた。新緑の季節でも、年老いた葉は大地に還る。

「あいつ、ゴリのこと、ぶっ殺すって言っていたよな」

「市川君、あの言葉、本気じゃないのかな」真澄は真顔で言った。どのような理由で彼女がそう言ったのか、カズには理解できなかった。

た。だが彼は彼女の言葉に頷いた。自分もまた、まったく同じように感じていたのだ。

結局、月曜日の登校時にトオヤマを二人で待ち伏せする約束をして、その日は別れた。テレビのサスペンスドラマのようだが、カズにとっても真澄にとっても極めて現実的な問題なのだ。カズはベツドの上で天井を見続けていた。白い天井をしばらく見続けていると、視界が白一色に塗りつぶされたように見える。（月曜日にトオヤマの奴が思いっきり遅刻して、ゴリと会わなければいいんだけどな）真澄の不安そうな表情を思い浮かべながら、そう思った。

月曜日の朝、空には黒っぽい雲が垂れこめている。手を伸ばせばそれらの雲に届くのではないかと思われるほどの低さだ。そのためか大気は重く、湿度は百パーセントを越えているようにも感じられる。風は全くなく、すべてのものが静止しているかのようだ。今にも大粒の雨が落ちてきそうで、生徒達は足早に校門をくぐっている。校門は国道沿いに位置しており、赤茶けた鉄製の扉は無機物の塊として存在している。強力な掃除機がゴミを吸い取るように、生徒たちは校門に向かって吸い込まれるかのように小走りになって急いでいる。

校門の前にはいつものように生徒指導担当のゴリとナスが立っていた。週の最初の日、たるんだ生徒はいないかと二人は目を光らせていた。

「おはようございます」と挨拶をしながらも、生徒たちは誰も彼らと目を合わせようとはしない。それは暗黙の了解であり、ある意味儀式的ともいえた。

カズと真澄は校門の右手と左手に別れてトオヤマを待っていた。トオヤマはいつもカズの待っている方の道、校門から向かって左手から登校してくるのだが、もしものことを考えて真澄はもう一方の通学路で待っていた。

「ベチャ」という音とともに、歩道に大きな雨粒が落ちてきた。パラパラと硬質な音を響かせ、暗い空から無数の雨粒がいつせいに降ってきた。

カズは慌てて傘を広げ、腕時計を見た。後三分で校門が閉まる。彼も真澄も校門から五十メートルくらい離れたところで待っている。で、そろそろ移動しなければ遅刻してしまう。一昨日の神社の件もあり、週の初めからゴリに睨まれるのはまっぴらだとカズは思った。彼はトオヤマが来る方を再度確認したがトオヤマらしき姿はなく、校門に向かって走っている数人の男子生徒の姿だけが目に映った。（またあいつ遅刻か、まあゴリに会わなくていいや）と思いながら、カズも駆け出した。学生鞆と傘がじゃまになり走りづらい。歩道にはすでにかんりの量の水溜りが、ところどころにできていた。彼が校門の前に着くと、真澄も水溜りを気にしながらやってきたところだった。カズが真澄に（トオヤマは来なかった）と顔で合図すると、彼女も頷いた。

「あと二分！」

降りしきる雨が作り出す様々な音をかき消すように、ゴリの低音が響いた。二人は校門をくぐるとなぜが少しほっとした。人待つ作業はそれなりに緊張するものなのだ。彼らが校舎に向かって歩いていると「あと一分！」という生徒指導教諭の声が再び響いた。

真澄はその声に反応するように後ろを振り返ると、不思議な光景が目に見え込んだ。ゴリが笑っていた。そして、嬉しそうに叫んでいた。

「トオヤマ、走れーっ。がんばれ。あと三十秒だぞ、間に合うぞ！」（トオヤマ君が走っている？）真澄はそう思うと、胸の中から発生した異様な圧迫感に衝き動かされた。

「市川君！」彼女はそう叫ぶと、傘も鞆も放り投げて校門に向かって走り出した。（やばい！）カズもダッシュし、真澄の後を追った。二人が校門で目にした場面は異様であり滑稽でもあった。ナス教諭は傘もささず腰を抜かして「あわわわわ・・・」と意味をなさな

い言葉を発している。ゴリはあらぬ方を向きながら、自分に何が起こっているのかわからないという顔をして立っていた。彼の左手は左わき腹のところでトオヤマの右手をつかみ、右手はまったく力が入っていないかのように、ぶらぶらと揺れている。トオヤマは相撲のぶつかり稽古の姿勢のように、ゴリの懷に前傾姿勢で飛び込んでいた。そして右手には黒い柄のサバイバルナイフを握り締めていた。ナイフの刀身の部分はすっかりゴリの左わき腹に刺さっていて見えない。だがそのサバイバルナイフが十二分に機能していることは、刺さっている箇所から血が流れ出て足元を伝い、アスファルトの歩道を薄つすらと赤く染めていることで証明されていた。カズは頭の中が白く霞んでいた。脳が数秒間、思考停止していた。

「バリバリ！」という轟音とともに激しい閃光が視界を包み「ドーン」という落雷音が地面を揺らした。地面の揺れがおさまると、トオヤマはゆっくりナイフを抜いた。それに合わせるように鮮血が吹き出た。ゴリはその時初めて激痛を感じたのか、両手で傷口を塞ぐようにつかみ、力なく座り込んだ。

「誰かーあ！ 先生方、誰かあ、誰かあ来てください！」

ナス教諭は甲高い声で叫びながら、一目散に職員室の方へ走っていった。異変に気付いた生徒が何人か校門の方へ集まってきた。

雨は滝のように降ってきた。あたりは夕闇にでも包まれていると錯覚するくらい暗い。ゴー！ という轟音しか聞こえない凄まじい雨の中、トオヤマはサバイバルナイフの先端を目の上にかざした。その刀身にあったゴリの血は豪雨で流されていた。彼は無表情にナイフをゆっくり首筋に近づけた。そして何かの反動をつけるように、右手を伸ばした。

「だめー！」

その瞬間、真澄はラグビーのタックルのように全身をトオヤマの体にぶつけていた。激しい衝撃に、無防備なトオヤマはもんどりうって仰向けに倒れた。しかしその右手には、サバイバルナイスが固く握られている。真澄は必死にトオヤマに抱きつきながら叫んだ。

「市川君、ナイフ！」カズはその声に、今自分が何をなすべきか本能的に把握した。彼はあわててトオヤマの傍に走りより、ナイフの握られている右手首を思い切り踏んだ。

「コラア！ トオヤマ、離せ！」

カズは相手の痛みなど想像することなく、トオヤマの右手首を踏み続けた。手首の凝り固まった感触が、運動靴を通じて伝わってくる。けれども渾身の力で踏み続けるうちに、トオヤマの右手はゆっくりと開いていき、真っ黒い柄のナイフが彼の手から滑り落ちた。そのサバイバルナイフをカズは思いつきり左足で蹴り飛ばした。ナイフは水の上を滑るように走り、「キン」と小さな音を立てて校門の黒い滑車に当たり止った。

カズは荒い息をしている真澄の腕を取り、トオヤマの体から離れた。それでもトオヤマは歩道に仰向けのままだった。口を開け、目を開いている。カズも真澄も全身ずぶ濡れで、体は冷え切っていた。真澄の柔らかな髪からは雨が滴り落ち、夏服の白いブラウスは何の役にも立たない。右腕には先ほどトオヤマとともに倒れこんだときにできた擦り傷で血がにじんでいる。それでも彼女はトオヤマの横に座って、彼を見つめていた。

「助けてくれ・・・」トオヤマが呻くように言った。

「助けてくれ、ここから出してくれ・・・」力のない声が、カズと真澄の胸に突き刺さった。

「トオヤマ君、ごめんね、ごめんね」

真澄は泣きながらトオヤマの右手を掴んだ。

「助けてくれ、ここから出してくれ・・・」トオヤマは真澄に手を握られていることに気付いていないのか、同じ言葉を言い続けていた。激しい雨粒をまるで感じていないのか、両目は見開かれたままだ。(トオヤマの奴、何も見えていないのか)カズは大の字になって雨に打たれているトオヤマが蠟人形か死人のように見えた。

「キヤー」

「ワタナベ先生！しっかり」

「こらあ！ 生徒は近づくな」

「救急車はまだか！」

駆けつけた教職員たちの怒号が飛び交った。教師たちのヒステリックな声に混じり、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

「トオヤマ君」山下先生の声が聞こえた。

カズと真澄二人にとって、その声だけが救いだった。山下先生はゆっくりトオヤマの体を抱き起こした。

「助けて……」

トオヤマは震えながらも、小さな声で言い続けている。山下先生はトオヤマの顔をその瘦せた胸に抱いて、大丈夫だ、大丈夫だよと答えていた。カズと真澄は二人の横に佇むしかなかった。

「市川君」

真澄の声は震えていた。彼女はゆっくりと涙に濡れた顔をカズの胸にうずめてきた。その瞬間カズは彼女の中にある、あまりにも深い哀しみを感じた。その哀しみがどこからきて、どのようなものなのか、彼にはわからなかった。しかし彼は彼女の哀しみをはつきりと感じたのだ。そしてそれは十三歳の少女が背負うには、あまりにも重過ぎるものだった。カズは彼女の哀しみの深さに驚き、怒りさえ感じた。自分たちのまわりには、なんて理不尽な暴力や絶望や哀しみが溢れているのだろう、誰か、どうにかしてくれ！ と天に向かって叫びたかった。

薄暗い闇の中、救急車の赤い点滅する光が近づいてきた。

大地が唸るような雷鳴は遠ざかっていった。

雨はまだ激しくアスファルトの歩道を叩いていた。世界は雨で黒く塗りつぶされていた。

第12章 ホットミルクと「ワルツフォーデビー」

その日の夕食後、カズはリビングルームのソファに座ってテレビを観ていた。画面では中学校の校長と教頭が硬い表情で記者会見に臨んでいた。

「事件を起こした生徒は、少々体が弱く休みがちではありませんでした。彼はおとなしい性格で目立たないタイプでしたが、特に目立った問題はなかったと担任からは聞いております」

「ワタナベ先生は柔道部の顧問で、非常に熱心に指導をしていました。生徒の生活指導にも一生懸命取り組んでいて、生徒たちも彼を信頼し彼の言うことはよく聞いておりました」

「どうして、このようなことが起こったのか、全くわからない、信じられないというのが、私どもの率直な今の気持ちです」

主に教頭がべらべらと話し、校長は自分こそが被害者だ、と言わんばかりの憔悴しきった表情を浮かべていた。「ナイフで刺された教師は全治二ヶ月の重傷ですが、幸い命に別状はありません」と、女性アナウンサーは興奮気味に話している。

カズはそのニュースを見て口の中に錆びたものが詰め込まれたような感触が湧き、リモコンでテレビのスイッチを切った。テレビはブチッという耳障りな音を出して、画面は暗闇に吸い込まれていった。先ほど母が作ってくれたパスタの味の名残が、今の記者会見を見たことで急速に薄れていった。

すると難しい顔をしている息子の前に、ホットミルク入りのマグカップがテーブルの上に置かれた。

「ちよっとお砂糖を入れてるからね」

珍しく早く帰宅した母が、優しい笑顔でそう言った。彼女は事件のことについて今この時点まで何ひとつ訊かなかった。そのかわりにカズが大好きなパスタ・ペペロンチーノを手際よくつくった。それから細かく千切りにしたキャベツに、あっさりとした和風ドレツ

シングを少量かけ、ポテトサラダを添えた。まったく食欲のなかったカズだったが、結局それら全部を平らげた。

カズはマグカップのホットミルクを一口飲むと、強張った体が少しほぐれていく気がした。(いくらゴリでも殺されなくてよかった。あいつが死ぬと喜ぶやつはたくさんいるだろうけど、トオヤマにとってみれば、殺人を犯したことになる。殺人という罪を背負って生きていくことは、トオヤマにとっては重過ぎる荷物のような気がする。いや、俺にとっても耐えられそうにない。だけど他人に暴力を振るったり、傷つけたりすることを一切否定することもできない。だって俺もいじめられているとき、カッターナイフで虫や草を切り刻んでいた。それだって命を奪っていることなのだから。あのままハセガワが死なずに、いじめられ続けていたら、俺だってナイフで誰かを刺していたかもしれない。それにハセガワが死んで、俺は嬉しかったのかもしれない。少しはいじめが減るのではないかと期待したんじゃないか?)

彼がそんなことをあれこれ考えていると、母はステレオにCDをセットした。ビル・エヴァンス・トリオの「ワルツ・フォー・デビイー」だ。ビル・エヴァンスの宝石のように美しいピアノが、部屋をしんとさせる。彼女は冷蔵庫から缶ビールを取り出してきて、息子の横に座った。

「カズ、あなた大変だったねえ。それから真澄ちゃんも」

「誰から聞いた?」

「美術部の山下先生、悪い?」

「別に」

カズは、母が事件のことをどれだけ知っているのだろうと思った。だが、そう考えると自分も含めだれがいつたいこの事件のことを、正確にわかっているかと思う。誰一人わかってはいない。真澄もトオヤマも山下先生も、もちろんゴリだって、わかっていない。まして教頭や校長などトオヤマの存在すら知らなかったのではないかと思う。

ただこのことは、ノイローゼ気味の中学生が、自分の嫌いな教師をナイフで刺したという世間ではありふれた事件のひとつだということだ。

「真澄ちゃんのうちは歯医者さん？」

「うん、知ってた？」

「小林歯科医院は有名だからね、いろいろと」

「じゃあ、兄貴が自殺したってことも？」

母は小さく頷くと、缶ビールを一口飲んだ。ビル・エヴァンスのピアノとスコット・ラファロのベースがひそひそ話をしているように、遠くで聴こえる。

「カズ、あなた明日から学校やマスコミ、警察とかがうるさく訊いてくるかもしれないけど、そんなことより真澄ちゃんのことをしっかり考えなさい」

彼女の表情はめずらしく真面目だった。カズはどういうことなのかと母の言葉の続きを待った。

「あなたが真澄ちゃんを好きなら、やさしくしてあげなさい。十三歳であそこまで、きちつとしているのは辛いことなのよ。彼女、カズの二倍くらい生きている感じがするのよ」

「どうせ、俺はガキだよ」

「ごめんごめん、そういう意味じゃないのよ。カズだって、いろいろ大変なのは母さんわかつているから」そう言うと彼女は息子に抱きつこうとしたが、息子はすつと身をかわして、

「もう！俺も結構疲れているんだから、ふざけた真似やめろよ」と怒鳴った。

母はソファから身を起こすと

「男の子は冷たいなあ。母さんがせつかく、やさしくしてあげようと思ったのに」

カズはその言葉に「フン」と答え、ソファに座りなおした。

「でもね、母さんはカズのこと大丈夫だっと思ってっているんだよ。見かけよりも強いっていうか、図太いっていうか鈍いっていうか」

「はいはい、わかりました」

十三歳の少年は、冷めつつあるホットミルクのマグカップを持って、自分の部屋に向かった。彼の母は、つぶらな瞳で息子を見送った。

翌日も雨は降り続いていた。学校は事件のため休校だった。午前中、学級担任の教師がやってきた。実際の年齢よりもかなり老けた感じのする女性教師は、昨日一日でさらに数歳、年をとった印象をカズにあたえた。

訪問の理由は、事件によるショックを受けた生徒に対して心のケアを行うということだった。しかし話の内容は、事件の内容は学校の方で調査しているので、その間マスコミの取材に対しては黙っているということだった。この事件について、いろんな噂や情報が飛び交うと、落ち着いて学校生活が送れなくなるというのが、学校側の言い分だ。カズは中学校が極度にマスコミ報道を恐れているのを感じ、胸の内のため息をついたが、「わかりました」と感情を表に出さずに言った。担任教師はクラス全員を回らなきゃいけないの言い残し、急いで出て行った。

夕方のニュースで、東京都内の中学三年生男子がクラスメート男子をナイフで刺し、刺した本人も自殺を図ったと報じられた。夜九時の続報では、刺された男子は死亡、刺した男子も意識不明の重体だということだった。次の日も四国の中学二年生男子が金属バットで母親を殴り殺していた。トオヤマがゴリを刺したことが合図になったかのように、中学生たちは人を殺し始めていた。

第13章 土曜日の午後

街はいまだに灰色に染まっていた。雲はいつたいどれくらいの水を含んでいたのかと思われるほど、雨は無表情に地面を叩いている。

真澄は事件が起こってから十日以上、学校を休んでいた。

そしてトオヤマは医療施設に入所措置された。

カズは自分の部屋の窓から、ぼんやりと外を眺めていた。家々の灯りが鈍い光を放っている。ラジオのFM放送からはクラシックのピアノ曲が流れていた。彼はつい先ほどこかかってきた電話のことを考えていた。

電話の相手は真澄からだった。受話器から聞こえる彼女の声は、いやに落ち着いていてカズを緊張させた。

「明日の土曜日、昼から市川君の家に行っていていい？ 話したいことがあるの」

カズにとって断るはずのない問いかけであり二つ返事でOKした。要件はそれだけで、あっけなく電話での会話は終わった。久しぶりに真澄の声を聞き嬉しいはずなのに、重苦しい不安が胸の内に渦巻いている。こういう勘って大体当たるんだよなあと思うと、その夜はほとんど眠ることはできなかった。

次の日、雨は霧雨のようになり空も少しずつ明るさを取り戻しつつある。

カズは朝から自分の部屋を片付けたり掃除機をかけたりにしている。と、不審に思った母が嬉しそうに訊いてきた。豊かな髪をひとつにまとめ、厚手のカーキ色ズボンはやつたりとしていて動きやすそうだ。白のTシャツにはジミ・ヘンドリクスがプリントしてある。

「今日、真澄ちゃんがつちに来るんでしょう？」

「そうだよ」

「何、無愛想な顔しているのよ。そんな表情していたら彼女に嫌わ

れちゃうわよ」

「うるさいなあ、邪魔だからあっち行けよ」

「はいはい、わかりました。ところで真澄ちゃんは何時に来るの？」

「一時過ぎです」と言いながらカズは母を部屋から追い出し、ドアをバタンと閉めた。

カズが母に言ったとおり真澄は午後一時過ぎにやって来た。薄い緑色のワンピースの上に白い半袖のカーディガンという服装は、彼女を少し大人っぽく見せている。玄関の黒いドアを開けたのは、カズではなくて母だった。彼女は嬉しそうに小柄な訪問客を迎えた。

「真澄ちゃん、久しぶり」

「こんにちは、おば様。あの、これつくってきたので二人で食べてください」

真澄はそう言うと、肩口に下げていた大き目の白い布の鞆から小さなめのケーキ箱を取り出した。ドアの横には薄いピンク色の傘が立てかけてあった。

「ありがとう、後で紅茶入れるわね。カズ、何しているの？ 真澄ちゃん来たわよ」

カズは真澄が自分の家にいることが何とも不思議な気がして、どう振舞ってよいのかわからなかった。彼女が白い靴を脱いで、玄関からカズの部屋に歩いてくる間も彼の口からは「よっ！」とか「こっち」とか、あまり意味のない、そして気の利かない言葉しか出てこなかった。

ひさしぶりに会った真澄は、いつものように涼しげで少し哀しそうな微笑を口元に浮かべている。カズの部屋にある折りたたみ椅子に真澄が座ると、彼女は興味深そうにあたりを見回した。

「へえー、市川君って読書家なんだ」

本棚には世界名作全集や村上春樹のハードカバーが並んでいた。カズは自分の椅子に背をもたれながら彼女の言葉を聞くと、少しずつ落ち着いてきた。

「今、村上春樹が一番気に入っているんだ」

「村上春樹って読んだことがないけど、どんな感じなの？」

「どんな感じ。ウーン、あの人の小説を読んだ後、ちゃんとしなきゃいけないっていうか、しっかりしようって思う、俺は。たとえば部屋の掃除をしたくなったりするんだぜ」

「ふーん、そうなんだ。私も読んでみようかな。そうしたら、キレイ好きになるかもね」

「それは人それぞれだから」

その言葉を聞いて真澄がわざとらしくカズを睨んだとき、ドアがノックされ、部屋の主が返事をする前に母が入ってきた。

「何だよ、勝手に入ってきて」カズの文句を無視して、母はチーズケーキと紅茶をテーブルに置いた。

「男の子と可愛い女の子が密室で二人きりという状況は危険でしょ。母さんは真澄ちゃんを守る義務があるのよ」

「また、なに訳の分からないこと言ってるんだよ」カズは口を尖らせて反論したが、母は馬耳東風といった感じで、真澄に話しかけた。

「真澄ちゃんの作ったチーズケーキ美味しいわね。繊細で甘さ控えめで、私感動しちゃった」

「何だよ、もう食っちゃったのかよ。食ってばかりだ。だから余分な肉が付くんだよ」

「カズ、あなた真澄ちゃんの前だからって、いい格好しようとする気持ちにはわかるけど、無理しない方がいいわよ。それから真澄ちゃん、カズが変なことしようとしたら大声で叫ぶのよ。おばさんが隣でちゃんと見張っているから。でもキスくらいは許してやってね」

真澄は小さく笑いながら「わかりました」と答えると、母は緑色のお盆を小脇に抱えながら、真澄に軽くウインクをして部屋から出て行った。

カズは母の言動に呆気にとられていたが、紅茶を飲んで気を取り直そう努めた。

「しばらく学校来なかったけど、大丈夫だった？」

「うん私は大丈夫。あのとき雨に濡れて、少し風邪を引いたけどそれほどたいしたことなかったし」彼女の声は低く響いた。

「これ、貰うわ」と言いながら、カズはチーズケーキに小さなフォークを突き刺し口に運んだ。

「山下先生が言っていたけど、トオヤマの奴だいが落ち着いてきたってよ。家族もあいつのこと、ようやくわかるうと思いはじめたらしい」

「そう」白いティーカップを両手で支えながら、真澄は呟くように答えた。

「それで、あいつ事件のこと、ほとんど覚えていないらしい。それどころか中学に入ってから記憶もほとんどないみたいで、唯一覚えてるのが俺と小林の顔だったさ」

「うん」

「それからゴリの奴も回復は早いらしい。精神的にはかなりショックだったらしいけど」

「そう・・・」

彼女の反応にカズは戸惑った。母が部屋から出て行ってからなぜか空気が少しずつ重くなっているように感じる。カズが次の言葉を捜していると、彼女は困った表情で口を開いた。

「私、転校するの」

「エッ？」

「明日、お母さんの実家に引っ越すの。だから今日、市川君にお別れの挨拶をしに来たの」

彼は自分の勘のよさを悔やんだ。昨夜の不吉な予感は的中した。

「どうして？」

カズの口から言葉が勝手に飛び出した。でもそれは彼の素直な気持ちだった。

真澄はテーブルのティーカップに視線を落としていたが、ゆつくりと顔を上げ彼を見つめた。そして深く静かに息を吐き出した。

「市川君、私のお兄ちゃんが去年の夏、自殺したこと知っているよ

ね

「うん」

「ナイフで左手首を切って死んだの。お母さん凄いショックで・・・あの日からお母さんの時間は動いていない」

カズはまた自分のマグカップに口をつけた。少し冷めた紅茶は、あまり味がないように感じる。

「お母さんにとってお兄ちゃんの自殺は現実離れたものだった。自殺した日も、お兄ちゃんいつもと同じ様子だったし遺書らしきものもなかった」

真澄は向かい合っているカズのクリーム色のトレーナーに視線を落とし、しばらく呼吸を整えていた。

「お母さんはお兄ちゃんが自殺してから今まで、お兄ちゃんが死んだことをずっと受け入れずに生きてきた。そうしないと生きていけないって本能的に感じていたみたい。だけど私がトオヤマ君の事件に関わったことで、お兄ちゃんの自殺のことを思い出したみたいで、パニックになったの」

「それはナイフのこと？」

「そう、トオヤマ君がナイフでワタナベ先生を刺して、それから自分も刺そうとしたとき私が止めたでしょ。どうしてそのことを母さんが知ったのか、わからないのだけど、そのことをものすごく怖がって。ヒカルが真澄を連れて行くとか、二人とも何処かへ行ってしまったとか、そんなことを言い出したりするようになったの」

カズはただ彼女の話の聞くしかなかった。

真澄は淡々と話を続けていく。

「それでお父さんがこの街を離れる方がいいって判断して、引っ越すことになった。お母さんにとってこの街は辛いこと悲しいことが多過ぎるから。引越し先はお母さんの実家で私とお母さんが先に行つて、お父さんもいろいろ整理がついたら後から来るってことになった。向こうにはおじいちゃんもおばあちゃんもいるし、お母さんも落ち着くと思う」

「そこは遠いの？」

「列車で三時間くらい」

「そうか、結構遠いな」

「うん」

そこまで話すと真澄は一息つき、紅茶をゆっくり飲んだ。それから白い鞆の中からCDケースを一枚取り出しカズに渡した。

「これ、私からのプレゼント。このCD聴くと元気がでるの。市川君も気に入ってくれると思う」

「ベートーヴェン、ピアノソナタ三十番、三十一番、三十二番。ルドルフ・ゼルキン」

カズはCDケースのライナーに映っている老ピアニストの写真に目を移した。老眼鏡を外し、本を読んでいる姿は安らいでいるように、落ち着いた印象をカズに与えた。しかし彼はそのCDなどほしくはなかった。

「ルドルフ・ゼルキン晩年の演奏だけど、正直っていうか誠実っていうか、彼の暖かな人柄が伝わってくるよ。とくに三十二番が」

「今から聴く？」

「うん、お願い」

カズは椅子から立ち上がると、ミニコンポにCDをセットしスイッチを入れた。ルドルフ・ゼルキンの思慮深いピアノが部屋を包んでいく。

「市川君、ひとつお願いがあるの」

彼女の表情はいつになく硬かった。カズは少し青ざめた彼女の顔を見て内心戸惑いながらも、「何？」と答えた。

真澄は唇を噛み、瞳を閉じ俯いた姿勢で迷っていた。それは彼女の内部に巢食っている何かと戦っているようにも見えた。

「これから話すことは、まだ誰にも言っていないの。市川君、あなただけに聞いてほしい。あなたにだけ。それから、この話は他の誰にも言わないって約束してくれる？」彼女の声は小さく震えていた。カズはその様子に不安を感じながらも「わかった」と答えた。

真澄は遠くを眺めるような眼差しで語り始めた。

最終章 六月の風

「お兄ちゃんが自殺する前に、彼、私の部屋にやってきた」

彼女はそう言いながら左手首の腕時計を外し、カズの目の前に白い左腕を晒した。その左手首には細かな切り傷が数本走っていた。

「実は私、小学校五年生くらいからリストカットしていたの。カッターナイフだけだね。理由はどうしてかわからないのだけど、リストカットすると頭の中のもやもやしたものがなくなって、すーっとする感じが好きで時々やってた。その晩もリストカットやっていたら、お兄ちゃんがドアをノックして、『真澄、入っていい?』って訊いてきた」

カズはびつくりして、彼女の白い手首を見た。

「私は慌てて左手首にリストバンドをしてお兄ちゃんを部屋に入れたのだけど、お兄ちゃん『リストカットするのなら、ナイフちゃんと火で消毒しといたほうがいいぞ』って言うの。私は家族の誰にもこのこと知られていないと思ってたから驚いたけど、気付いたのがお兄ちゃんだと思うと仕方がないなあとすぐに納得したの」

「どうして」

「お兄ちゃんはすごく勘がいいの。ううん、勘がいいと言うよりは、何か全部わかっちゃうっていうか、できてしまうっていうか。私が十とか二十とか努力しないとできないことを一だけしたらできるのがお兄ちゃんなの。ピアノなんか私も私が一週間、一生懸命練習して上手くできないパートを一時間くらいの練習で弾けちゃうのよ」

「ふーん、天才的だ」カズは冷めた紅茶を飲み干しながら、呟いた。「それで、その晩のことだけど、お兄ちゃんがベッドに座りながら訊いてきたの。『真澄、お前の血は赤いか?』って。お兄ちゃんにしては面白いこと言うのでどういうことって訊き返したら、『僕の血は透明だよ』って答えたの」

真澄はそこまで話すとティカップに口をつけた。ルドルフ・ゼル

キンのピアノは三十二番の第二楽章に入っていた。

「私、いつものお兄ちゃんと違うなってそのとき気付いたの。それってどういう意味なのと訊いたら『僕はサイボーグみたいなものだよ、まわりから与えられた指示通りに動くロボットさ』って真面目な顔で答えたの。『僕は小さいときから天才だとか優等生だとか言われてきた。実際に勉強もスポーツもピアノだって人並み以上にできた。それもあまり努力しないでね。何故だかわからないけど、できてしまう。学校の勉強なんて授業をちゃんと聞いていれば、テストに出るところなんか大体予測できるし、それがほぼ的中する。みんながどうしてあんなに苦労するのか、そっちの方がわからないね。テニスの試合だってそうさ。相手のレベルがすぐわかる。対戦相手がどこを狙っているかとか、どのあたりの守備が弱いとか見えてしまう。だから当然僕が勝つわけだ。小さい頃は嬉しかったよ。みんなは褒めてくれるし、女の子なんかもキヤーキヤー言うし、それに僕は男の子たちにも人気があつた。でも、だんだん不安になってきた。僕はまわりの期待に応えるために動いているだけではないかと。いつの間にか自分自身というものが少しずつ削り取られて、何でもできる天才児という上っ面だけが一人歩きしているのではないかと。僕は血の通った人間ではなく、指示を受けたらそのとおりに動くロボットみたいなものなのさ』そう言って小さく笑った」

カズは小林ヒカルの隠された苦悩を聞き、かつての自分が給食でひどいものを食べさせられたときのことを思い出した。そのとき、自分自身の身体は別の物体だという意識で、その危機をなんとか乗り越えた。しかし、カズのその行為は自分の外からのいじめで仕方なくやったことで、ヒカルの場合は自分自身が自分を切り離しているように思えた。

「私驚いて、それお兄ちゃんの考えすぎじゃない、お兄ちゃんだって苦労したり困ったりすることあるでしょって訊いたの。するとお兄ちゃんは一言『苦労したことは、多分ないよ』って答えた。私その時わかったの。ああ、この人本当に神様みたいにいるんなことが

すすいとできちゃうんだあつて。私みたいな平凡な人間とは違
うってことが」

真澄はそこまで話と何か思い出すように瞳を閉じた。そして深く
息を吸い込み、それからゆっくりと息を吐き出して呼吸を整え、再
び話始めた。

「それからお兄ちゃんはこう言った『だけど悩みは二つある。ひと
つは僕の人生がもう決まっているということさ。これから高校に進
学して大学の医学部に入学し、医者になり結婚して子どもを二人く
らいつくる。そして老齢になるまで医者として働くのさ。真澄、そ
れ以外の僕の人生考えられるかい！ 親もお前も友達も学校の先生
たちも、僕の知っている人はみんな僕が医者になることを望んでい
る。そして僕は、僕の脳はするようにインプットされている。僕に
は見えるんだ。僕の周りには真つ白な壁がそり立ち、僕を取り囲
んでいる。そう、そこはまるで無菌室のようだ。僕はずっとその白
い清潔な世界を歩いてきて、これからも死ぬまでそこに留まってい
る。まさに僕にぴったりだろう、えっ！ 真澄、そうだろう！』私
お兄ちゃんの激しい口調に驚いて何も言えなかった」

彼女の言葉は空気中に吸い込まれ、部屋は全くの無音だった。ル
ドルフ・ゼルキンはピアノソナタ三十二番を弾き終えていた。

「それで、もうひとつの悩みは何？」カズは息苦しさを覚える沈黙
を破るように訊いた。

「お兄ちゃんは自分が興奮したことに気付いて、少し黙っていた。
それから、にやって笑ったの。その笑い顔がすごく怖かった。どう
してだかわからないけど、体の芯まで凍えるような笑顔だった。そ
れからお兄ちゃんはまた話し始めた。『真澄、僕はどうしようもな
い人間だよ。僕は人を傷つけないと生きていけないんだ。中学に入
った頃からかな。優等生の仮面を被り続けると、身体の奥底から何
かわからない異物のようなものがだんだん膨らんできて身体が爆発
しそうになる。だから爆発する前にナイフでいるんな生き物を殺し
て、そうなるのを防いできた。以前我が家で飼っていた黒猫がいな

くなっただろう。あの黒猫も僕が殺した。神経を麻痺させる薬を注射して、生きたまま腹を掻つ捌いたのさ。僕のナイフはインターネツトで買ったサバイバルナイフで、真澄のカッターナイフと違ってよく切れる』話しながらお兄ちゃん、ずっと笑っていた。」

カズは自分の部屋の空気がこれほどよそよそしく感じたことはなかった。深い海の底ににいるのではないかと思うほど、空気が重く感じられる。

「お兄ちゃん、真っ青になっっている私をちらっと見ながら話を続けた。『そのうちに、生き物を殺すことよりも面白いことを見つけた。それは言葉で人を殺すことだ。真澄、ペンは剣より強しという言葉は真実だよ。うちの中学校のクラスには大体一人か二人不登校が保健室登校の奴がいるだろ。そいつらが僕の獲物さ。僕は学級委員長か生徒会長だったから、不登校気味の奴の家を訪問する大義名分があった。それに僕は何故だかわからないけど、引きこもっている奴たちにも人気があった。だから先生を拒否する奴でも、僕とは会ってくれるんだ。それで部屋で二人きりになったとき、引きこもっている奴に、追い討ちをかけるようなひどいことを言うのさ。担任の先生はお前のことをダメでどうしようもない奴だとか、クラスの連中はお前が来なくなっただけでクラスが明るくなったとか、でたらめを言う。そして僕はそんなひどいことを言う人たちに抵抗しているけど、なかなかうまくいかないとか言っただけは美化する。引きこもっている奴が僕の嘘を信じて、もっとひどく傷ついていく。僕はその哀れな姿を見ることが嬉しくてしょうがない。この間も面白いことがあった。以前通っていたテニスクラブに顔を出したとき、真澄と同年の男子が来ていて、話しかけてきた。そいつは僕のことを崇拜しているようだった。そいつはエリート面してこう言った。僕はクラスのいじめの黒幕をしていると。だから僕はそいつにこう言うてやった。お前、いじめられている奴はお前がいじめを指揮していることも知っているし、そいつは一生お前を恨んで、何かのきっかけでお前を殺すかもしれないぞ。いじめっ子は一生殺人者に狙わ

れる宿命だと脅してやった。僕の話聞いて、そいつは顔が真っ青になっちまった。ははは、人間本当に顔が青くなるんだなあ、真澄『私、もう話聞きたくなくて、手で耳を塞ごうと思ったけど身体が言うことをきかなくて……』そいつ、死んだよ。この前トラックにはねられて』ってお兄ちゃん言うの」

（そいつはハセガワのことか！）ヒカルの告白を聞きカズは天井が回っているような、不思議な浮遊感を感じた。それほどの衝撃だった。

「私ショックでしばらくぼーっとしていたら、お兄ちゃん、もう笑っていなかった。『真澄、人が死んだら、意識も魂もまったくなくなってしまふのかな？ 暗黒の虚無に吸い込まれてゼロになっちゃうのかな』って訊くの。私、ぼんやりした頭で、死んだらゼロになるんじゃないかと宇宙と一体になるんじゃないかなあって答えたの。どうしてそんなこと言ったのか、いまだにわからないけど。お兄ちゃん『そうか、死んだらこの宇宙と一体になるという考えもあるなうん』と頷いて、妙にさっぱりした表情で部屋から出て行った。そして次の日の朝……お兄ちゃんは死んでいた……。』彼女の声は消え入りそうだった。

カズは怒りで胸が震えた。そして同時にどうして真澄がこれほど深く傷つけられ、重過ぎる荷物を一人で抱えて生きてかなければならないのか、理解した。ヒカルの最後の言葉は真澄に対してだけ語られるものだった。彼は自分の罪を語ることでこの世界と決別しようとした。そしてヒカルの罪と哀しみを背負って生きていくことができるのは、真澄しか存在しなかった。おそらく真澄はヒカルがただ一人愛した人間だったのだ。彼女は兄の死と罪を受け入れ、その贖罪のために生きていく決意をしたのだ。だからこそ狂気に蝕まれている母を守り、死の影に怯えるトオヤマを救い出そうとした。

真澄は静かに俯いていた。瞳からは涙が滴り落ちていた。そして小刻みに身体が震え始めた。

「小林……………」

その声に反応するかのように、彼女はカズの胸に顔を埋め泣き始めた。彼女がこれまで押さえ込んでいた感情が一気に溢れた。

真澄の両手は彼のトレーナーをきつく握り締めていた。

「疲れちゃった」

「淋しい・・・」

「引つ越したくない・・・」

「嫌だ、こんなの嫌だよう」

「市川君助けて・・・」

カズは真澄の言葉を聞かたびに胸が切り裂かれたように痛み、それでも必死になって彼女をやさしく抱きしめようとした。

部屋に西日が射し込んできた。

いったいどれくらい真澄は涙を流したのだろうか？ そう思うとカズはまた悲しくなった。明日になれば自分が大好きな少女は深い哀しみを抱えたまま、自分の前から消え去ってしまう、彼はその現実

に憎しみすら覚えた。

「ごめんね、トレーナー濡らしちゃったね」涙で目をはらした真澄は、照れくさそうに小さく笑った。カズは何も言わず顔を横に振るだけだった。

「市川君、ありがとう」

彼は何も言えなかった。真澄は左手首の腕時計に目を落とした。

「お母さんが不安になるから、そろそろ帰らなきゃ」

「うん、わかった。俺、母さん呼んでくる」カズはドアを開け、母を呼んだ。

数分後、母は玄関ドアの前で待っていた。

「おば様、残念だけど私、明日母の実家に引越すことになって。これまでにいろいろありがとうございました」

「カズから聞いたわ。残念ねえ。あいつは大ショックでしばらく落ち込むと思うけど、私の子だしね、まあ何とかなると思うけど」
そこまで話すと母はゆっくりと真澄を抱きしめた。

「真澄ちゃん、幸せになりなさい」

真澄は少し驚いたが、すぐに母の豊かな胸に安心したように顔を埋めた。

「あなたが幸せになることを、私もカズも願っているわ。だから真澄ちゃん、自分のことをしっかりと考えて幸せになりなさい」母の胸の中で彼女は数回頷いて、顔を上げた。カズはそのとき初めて、少しリラックスした真澄を見た。

「それじゃあ、帰ります」

「うん、じゃあね。真澄ちゃん、ここに来たいときはいつでも来ていいのよ。コラッ、カズ！ 何ぼーっと突っ立てるの。真澄ちゃんを家までちゃんと送りなさい。だめねえ、男の子は」母の声に急ぎ立てられるかのように慌てて靴を履いているカズの様子を見て、真澄はクスツと笑った。

二人はマンションのエレベーターに乗り、バスの停留所まで歩き、バスに乗り込んだ。そしてバスが彼らを、真澄の家の近くにある停留所まで運んだ。二人はバスから降りるまでほとんど話さなかった。真澄の家は高台にあり二人は閑静な住宅街の坂道を上っていく。

上空を白く薄い雲が足早に流れていく。

夕陽は彼らの後姿をオレンジ色に染め上げていた。

カズは真澄に言いたいことが山ほどあるような気もするし、言うべきことは一言もないような気もした。ただこのまま彼女を家まで送り届けるだけで彼女と別れてしまうのは、すぐ後悔するのではないかと理由もわからず、そう感じていた。

「市川君、この公園すつごく見晴らしがよくて、私のお気に入りなの。少し寄っていかない？」カズは彼女の言葉に少しほっとして「ああ」と短く答えた。その公園は無人で、今日一日の役目を終えたように見えた。真澄はカズを見晴台に誘った。

太陽はすでに西の地平線に沈み始めていた。

二人が住んでいる街は、すべて暖かなオレンジ色に包まれていた。東の空はすでに青紫色に染まり始めている。

隣で夕陽を見ている真澄の顔は、静かに微笑んでいた。

カズはこの瞬間の風景を忘れることはないだろうと思った。

「小林・・・俺、小林がこんなに辛くて哀しい想いをしているの、全然わからなくて、ごめんな」そう言ったとき、突然彼の目から涙が溢れた。真澄は何も言わず、微笑を浮かべたまま顔を左右に振った。

「小林が俺に話してくれたこと、俺一生忘れない。それから、死ぬまで誰にも話さない」

彼女は小さく頷いた。そしていたずらっぽい眼差しで、

「市川君、私にお別れのプレゼントちょうだい」と言った。カズは「エッ？」と戸惑っていると、真澄の柔らかな両腕が首にまきついた。深く茶色に輝く瞳が目の前に迫り、暖かく柔らかな唇が彼の少し乾いた唇を塞いだ。

短く長い十秒間が過ぎた。

「市川君、ありがとう・・・さようなら」真澄はそう告げると駆け出した。

（俺はいつも小林にやられっぱなしだ）と思いながら彼は慌てて手を振った。

「小林！ また会えるよな！」その声が聞こえたのか彼女は一回だけ振り返り「うん！」と大きく答えた。

そのとき一陣の風が彼女の前髪を揺らした。その六月の風は夏の匂いを含んでいた。

カズはいつまでも真澄を見送っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0834f/>

ガールフレンドとサバイバルナイフ

2010年10月31日23時12分発行